

fig. 254 8号墳(東から)



fig. 255 10号墳(南から)

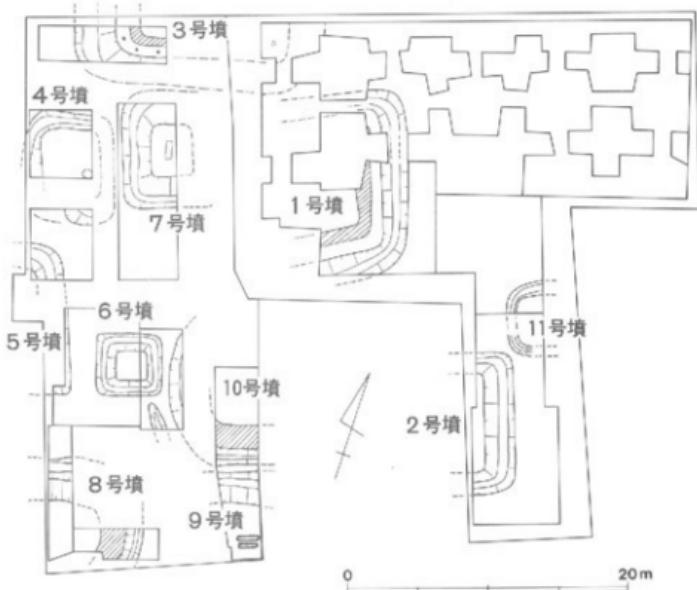


fig. 256 II期古墳位置図(1次・2次全体図)

Ⅲ期（古墳時代後末期）

調査区の北西隅から南東隅へ向かって流れる河道と、その両側にピットを若干検出した。ピットは掘立柱建物址を構成するものとして把握できない状況である。

河道の西肩は、4・5・9区で検出しているが、東肩は明確にできず、最大幅約8m、最深部で約60cmを測る。この河道の埋土を構成する砂層中より多量の遺物を検出している。遺物は、須恵器・土師器を中心に、古墳時代後期の円筒埴輪、漁網錘や飯蛸壺（須恵器・土師器）などの漁労具も出土している。

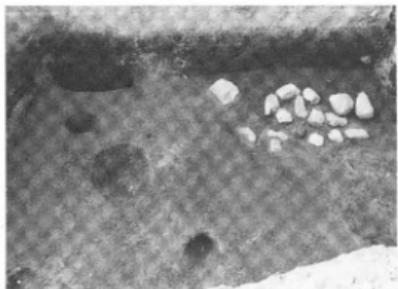


fig. 257 1区Ⅲ期遺構



fig. 258 5区Ⅲ期遺構

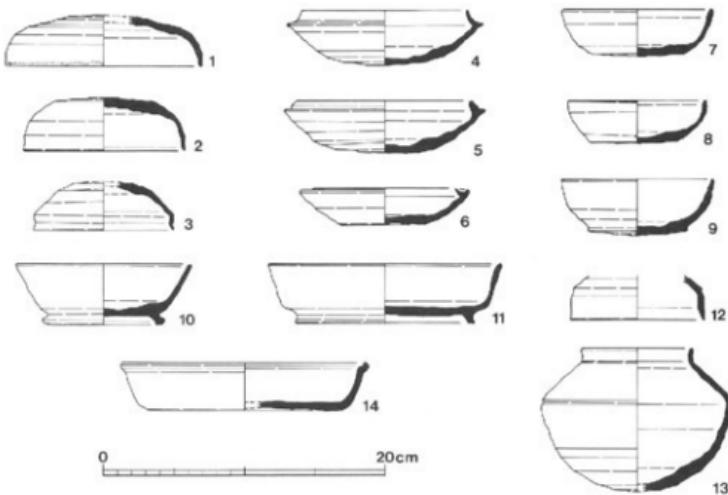


fig. 259 Ⅲ期出土遺物

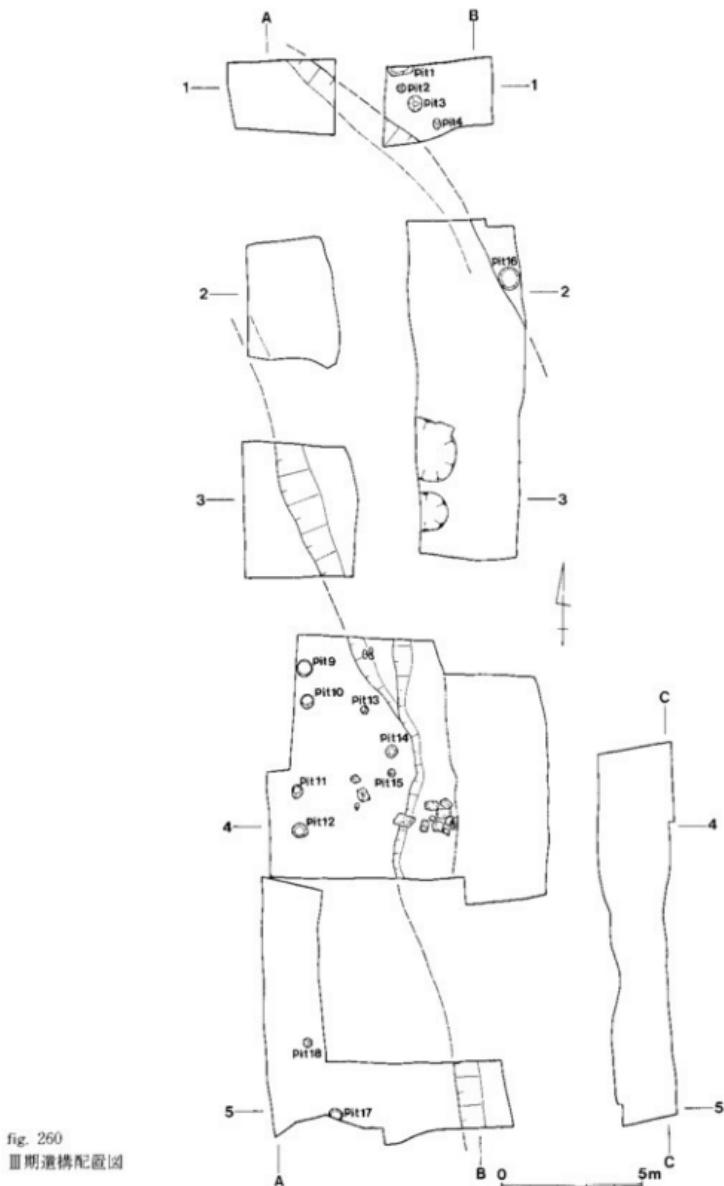


fig. 260
Ⅲ期遺構配置図

3.まとめ

以下、今回の発掘調査における成果をまとめながら、今後の検討課題を呈示してまとめにかえたい。

- 1 I期では明確な遺構はあまり検出できなかったが、まとまった量の土器が出土している。これらの土器は、その製作・調整技法等から傾向として庄内式併行期のものが主流を占めると考えられる。しかしながら、当地域における類例も少なく、その編年的位置づけについては、さらに検討が必要である。
- 2 II期では第1次調査地区を含めて合計11基にも及ぶ小型方墳を群集形態で確認したことが特筆できる。当該期には古式群集墳とも呼ばれる木棺直葬墳が丘陵上等に群集して営まれる類例を多く見ることができ、群集墳として、当遺跡の古墳も同様の性格を有するものと考えられる。その一方で当遺跡の古墳については、その群集形態が周溝の切り合いこそ認められないものの、古墳がこれほど近接して営まれている類例は管見に触れないものである。

また、当遺跡の北東約400mには全長約40mの前方後円墳である坊ヶ塚古墳があったとされ、さらにIII期の河道内に多量の埴輪片が含まれる点から、古墳の分布の広がりは北側へ大きく延びるものと思われ、ある集団の大きな墓域を形成していたと考えられる。そして、この古墳を営んだ集団の居住地を北西方向に隣接して位置する郡家遺跡の時期的に併行する堅穴住居址の一群に比定できるのではなかろうか。

- 3 III期では、河道内より多量の遺物を検出した。当該期の資料は神戸市内ではそれほど多くなく、菟原郡衙に先行する集落址確認の期待とともに、土器の編年作業も必要となろう。

以上のように今回の発掘調査によって、当遺跡は古墳時代を通して営まれた遺跡であることが確認された。今後周辺隣接地の発掘調査が進展するにつれて、遺跡の実態がより一層明らかにされるものと期待する。



fig. 261 7号・8号墳出土遺物

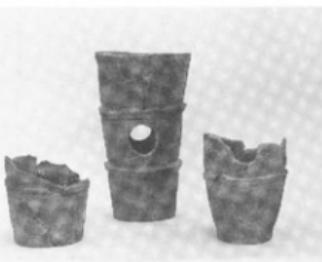


fig. 262 3号墳出土埴輪

18 住吉宮町遺跡—第3次調査—

1 はじめに

今回の調査地は、標高約20mの複合扇状地上に立地している。

当調査地の約150m西の地点で、1・2次調査を実施し、弥生時代や鎌倉時代の遺跡とともに、合計11基の古墳が発見された。このうち、規模の大きな古墳では、貼石や埴輪を立てる古墳が検出されている。また、古墳時代の土錘や鐵鋸壺など、漁労生活に関係する遺物も出土している。

2 調査の概要

(1) 基本圖序

基本層序は、現代の盛土層・旧耕土・赤褐色砂・褐色砂および灰色砂(遺物包含層)・黄色砂となる。遺構は黄色砂に切り込まれて検出される。黄色砂以下の下層は、試掘坑及び攪乱坑等を利用し、調査を行ったところ、黄色砂及び粗砂・細砂層が互層となって比較的緩やかな堆積があったことを示す層が約1m確認された。この層の下層は、砂礫層となっている。黄色砂より下層では、遺構、遺物は検出されなかった。

遺物包含層より古墳時代須恵器壺身・壺・壺、中世須恵器壺・鉢・土師器壺・皿・瓦器壺・皿、青磁碗・白磁碗などが出土している。これらの調査結果から、遺物包含層は中世の堆積土とみられる。

(2) 檢出濃柵

検出された遺構は、溝3条・土坑2基・落ち込み状遺構4基・ピットなどである。

S D 01

S D01は、調査区東側をほぼ南北に流れる幅約2.5m、深さ約0.1mの自然流路である。S D01より古墳時代須恵器壺・甕、中世須恵器壺・鉢、青磁碗等が出土した。出土遺物量の大半は古墳時代のものであるが、遺構は鎌倉時代13世紀ごろと考えられる。



fig. 263 調査地位図 1:2,500

S D02 S D02は、幅約2.5m、深さ約0.2mの南流する自然流路である。須恵器壺、土師器壺等が出土している。遺物より古墳時代6世紀末ごろと思われる。

S D03 S D03は、調査区西端中央部で検出された、石で構築された暗渠である。褐色砂（中世遺物包含層）に掘形を掘り、南辺と北辺に長径20~30cmの河原石を並べ、花崗岩を扁平に割った石を両辺の石に架け、蓋としている。掘形内には、径10cm大の河原石を詰めている。石材は概ね花崗岩である。溝部分の幅は約0.1mで、全長約4.5m検出され、調査区外へ延びている。遺物は、溝掘形内より土師器、須恵器、近世鉢が出土した。遺物より、18世紀ごろの遺構と考えられる。



fig. 264 調査地全景(西から)



fig. 265 S D03検出状況

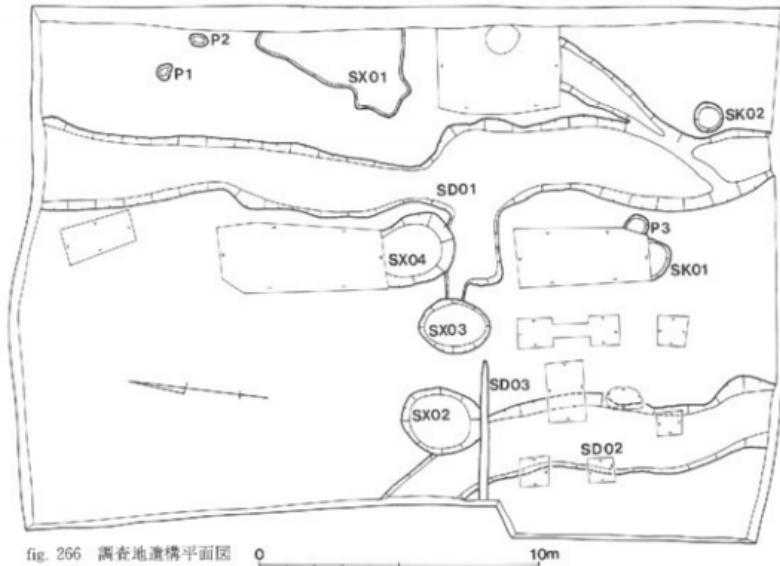


fig. 266 調査地遺構平面図 0 10m

- S K01** S D01は、試掘坑で北半を削り取られており、形状は不明であるが、直径約1.6m、深さ約0.2mの平底の土坑であったと考えられる。遺物は、土師器片が出土したにとまる。
- S K02** S K02は、直径約1.2m、深さ約0.1mの浅い皿状の土坑で、遺物は出土しなかった。S K01・02とともに、遺物からは時期を決定し難い。
- S X01** S X01は、形状が不整形の深さ約0.1mの落ち込み状遺構である。古墳時代須恵器焼片、土師器片と製塙土器が出土した。古墳時代当時、海岸線が付近にあったことを想起させる遺物である。時期は6世紀ごろと思われる。
- S X02** S X02は、長径約3.0m、短径約2.4m、深さ約0.5mの楕円形の土坑である。土師器、須恵器、青磁、瓦器片が出土した。
- S X03** S X03は、長径約2.6m、短径約2.0m、深さ約0.5m楕円形の土坑である。土師器、須恵器片が出土した。
- S X04** S X04は、北半が試掘坑によって削られている。短径約2.4m、深さ約0.5mの土坑である。土師器、須恵器、瓦器片と用途不明の漆器片が出土している。

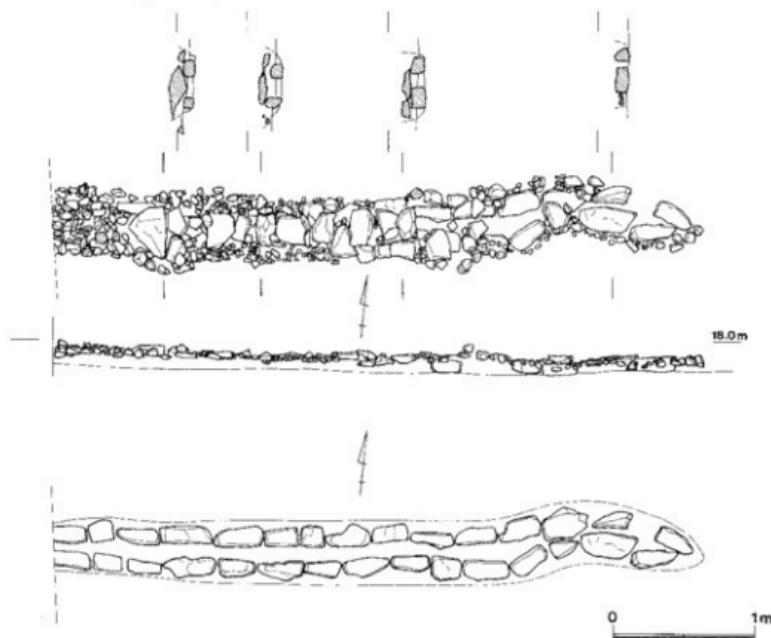


fig. 267 S D03平面・断面・立面図（下）被覆石除去後平面図

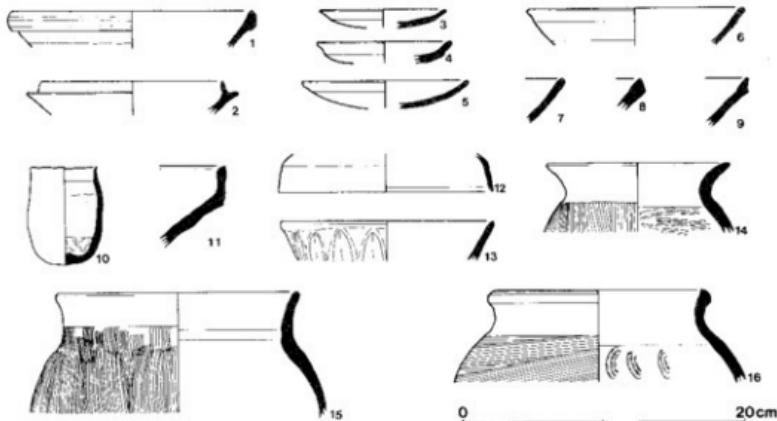


fig. 268 出土土器実測図 1~9包含層 10 S X01 11 S D03 12 S D01 13 S X02 14~16 S D02

S X02~04は、出土遺物や土層堆積状況から特に造構の性格付けを行うことは、困難である。しかしながら、規模、形状、検出状況に共通点が見られ、ほぼ同時期（13世紀ごろ）に何らかの目的で人為的に掘られ、土の再堆積によってその機能を終えたことが推測できる。

ピット1・2 ピット1、2は、S X01内堆積土とよく似ており、古墳時代のピットと考えられる。ピット2より須恵器片が出土している。

ピット3 ピット3は、直径約0.8m、深さ約0.2mのピットである。ピット内より土師器・須恵器片とともに染付陶器が出土している。17世紀以降の造構であろう。

3.まとめ 造構は、溝・土坑・落ち込み状造構等が検出された。また、造構の時期も古墳時代・鎌倉時代・近世と多彩である。

S X01で出土した製塙土器はほぼ完形で、その利用上破片で出土することが多い中で稀少な出土例である。また、住吉宮町遺跡1・2次調査で出土した飯蛸壺や土鍤等とともに海の生産用具としての共通性があり、当時海岸線が遺跡の周辺にあったことが考えられる。

当初1・2次調査地点と同様の造構のひろがりがあるものと予想された。前回調査地点に比較し、検出された造構・遺物が少なく、遺跡の中心を求めるとするならば、1・2次調査地点周辺であり、当調査地点は、遺跡の東限であろうと考えられる。

19. 森北町遺跡

1. はじめに

森北町遺跡は昭和20年代以来、弥生時代～古墳時代にかけての遺物が採集され、昭和50年代になって発掘調査が行われるようになって、弥生時代～古墳時代の集落址として周知されていた。今回、住宅建設工事の計画により、試掘調査を行った結果、現表土下約0.15～1.0mに弥生土器、須恵器を含む層が検出された。協議の結果、住宅建設に伴い遺跡が破壊される範囲約500m²について発掘調査を実施することになった。

位置と環境

過去の調査

森北町遺跡は、東灘区森北町の丘陵裾部（標高約32m）に位置している。

今回の調査地より東約150mにある森稻荷神社の東方、芦屋市に近い場所でかつて碧玉製紡錘車が採集され、個人の所有となっている。また、昭和39年、南東約100mにあった松風荘内の浄化槽建設時に厚い包含層が検出され、完形の長頭壺を含む多くの遺物が出土している。

昭和57年5月～7月にかけては、日本放送協会東灘世帯寮新築工事に伴う調査が当委員会によって東約300mの地点で実施され、弥生時代中期の溝、鎌倉時代の溝等が検出されている。

2. 調査の概要

今回の調査は、木造病棟建設時に北半部を削平していたこともあって、遺構としては竪穴住居址2棟と自然流路及び溝等が検出されたのみであったが、自然流路内より多量の土器類が出土し、かつて大きな集落が存在したことを推測し得るようになった。



fig. 269 調査地位置図 1:5,000

I 繩文時代 造構は全く検出されていないが、自然流路の最下層より晩期後半の深鉢片が数片出土した。

II 弥生時代 同じく造構はないが、自然流路内から土器、石器類が出土している。土器は少量であるが畿内第Ⅲ様式を主体とし、Ⅳ様式も若干見られる。

また、生駒西麓産と考えられる中期中頃の壺体部片も検出している。石器は、サスカイト製打製石鎌1、大型蛤刃石斧2、半月形直線刃の磨製石庖丁1及びサスカイト剝片がある。

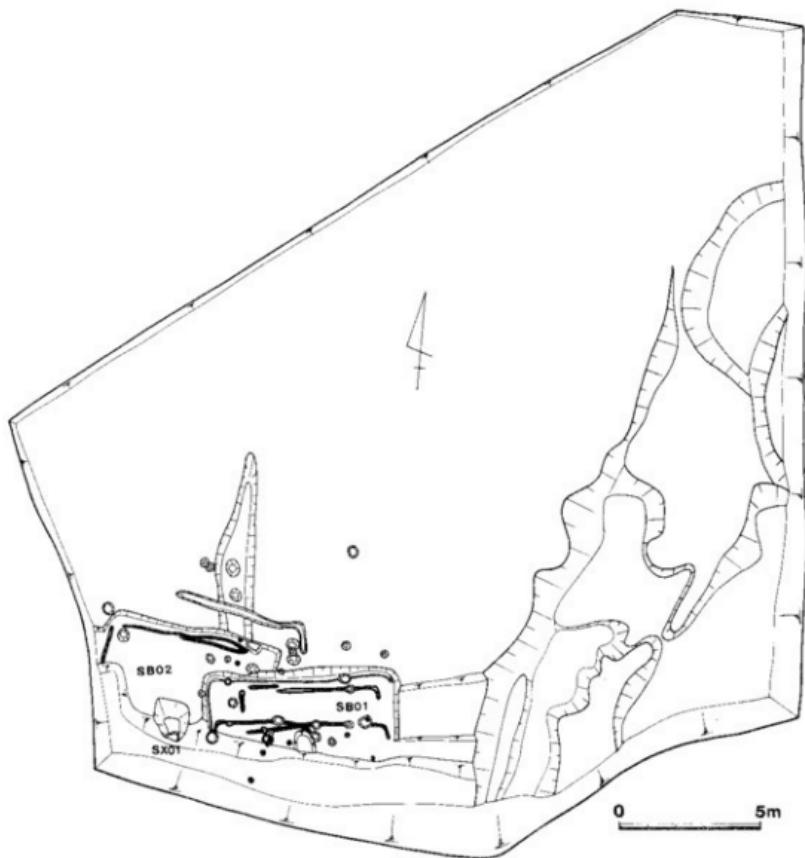


fig. 270 調査地遺構平面図

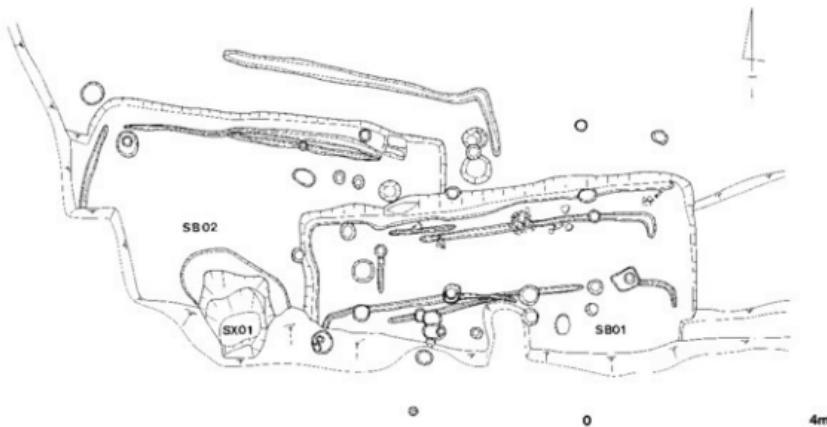


fig. 271 住居址平面図

III 弥生時代末葉～古墳時代初頭

SB02

東西6.4m、南北4.6m以上、深さ約0.3mを測る方形堅穴住居址で、後述のSB01により南東部を破壊されている。住居址北側でこの北辺と東辺にはほぼ平行してある逆L字形の小溝は、住居址に伴うものとも考えられる。柱穴は西北と北東隅で検出され、本来4本柱と推定できる。住居址の時期を決める土器は細片が多いが、観察しうる限り須恵器は1片も混じらず、外面に太いタタキ目を有する甕の破片が多く、この中には極めて小さな平底を残す程度のものがある。これより判断すれば弥生時代の終末ないし古墳時代初めのものと言える。さらに、その位置から見て住居址の中央土坑と考えられるSX01出土土器や、住居址を薄くおおっていた包含層の出土土器も、これもほぼ同時期と考えて大過ないものと思われる。

この時期の遺物は自然流路からも出土しており、外面に細いタタキ目を持つ在地産の庄内型甕や、西の影響を受けた土器(図277-10)も見られる。

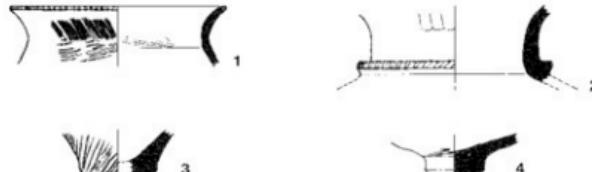


fig. 272

SB02および包含層出土土器実測図

0 20cm

銅鏡片

堅穴住居址 2 (S B02) の北で、これをおおう包含層の上面において検出した。現存長4.2cm、同幅2.8cm、最大厚(突帯部)3.65mm、最小厚1.6mmを測る。鏡背文の構成は、内側より銘帶—突帶—櫛齒文帶—銘帶となっており、重圓銘帶鏡の一部と考えられる。銘文は陽鋲され、内圈に2文字、外圈に1文字が見られる。後者の文字は不明だが、前者の2文字はこのタイプの鏡の銘としては一般的な字句「……心忽揚而願忠……」であるとすれば、「心」及び「忽」に当たると考えられる。字体については推定「心」字の筆端が楔形を呈す特徴を指摘できる。製作年代は以上のことより前漢代後半と考えられる。鏡背面は磨滅が進み、突帶もシャープさを欠く。内圈下の文字の鋲側断面は研磨されている可能性があるが、これ以外の部分についても認められない。二次的な穿孔も認められない。

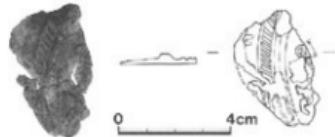


fig. 273 前漢鏡片

IV 古墳時代中期

S B01

堅穴住居址 S B01は床面より若干浮いた状態で出土した土器から判断すれば、5世紀末葉と考えられる。

東西長7.0m、南北3m以上、深さ0.55mを測る。周壁溝は北辺及び西辺に検出されたが、その内側にもう1条周壁溝とみられる溝が認められ、この住居址は拡張されたものと考えられる。さらにこの南にも住居址床面中央で交差する2本の溝があり、これも周壁溝の一部と認めれば、S B01以前に少なくとも2棟の堅穴住居が存在したことになるが、その時期を明らかにすることはできなかった。また住居址埋土からは縄垂文を有す韓式系土器片が出土している。



fig. 274 調査地全景

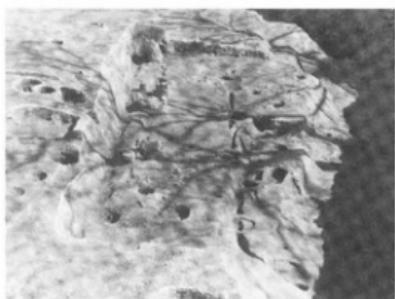


fig. 275 堅穴住居址

自然流路

調査区の東半部で北東より南西に流れる溝で、検出長約24m、深さは南端で2.6mを測る。幅は北で約4.5mを測るが、南へ行くに従って拡がり東岸は調査区外となる。

土層の状況は、最下に灰色砂礫層が堆積した後、両側より黒色砂礫層が流入し、最後に褐色砂礫層により埋まったことを示している。遺物はこの3層共に含まれ、古墳時代中期の土師器が大部分を占め、それに須恵器、韓式系土器、弥生土器、縄文土器が加わる。

出土土師器は未整理のものが多く様相が明確ではないが、須恵器を共伴する時期のものを中心とすると思われる。



fig. 276 流路内遺物出土状況

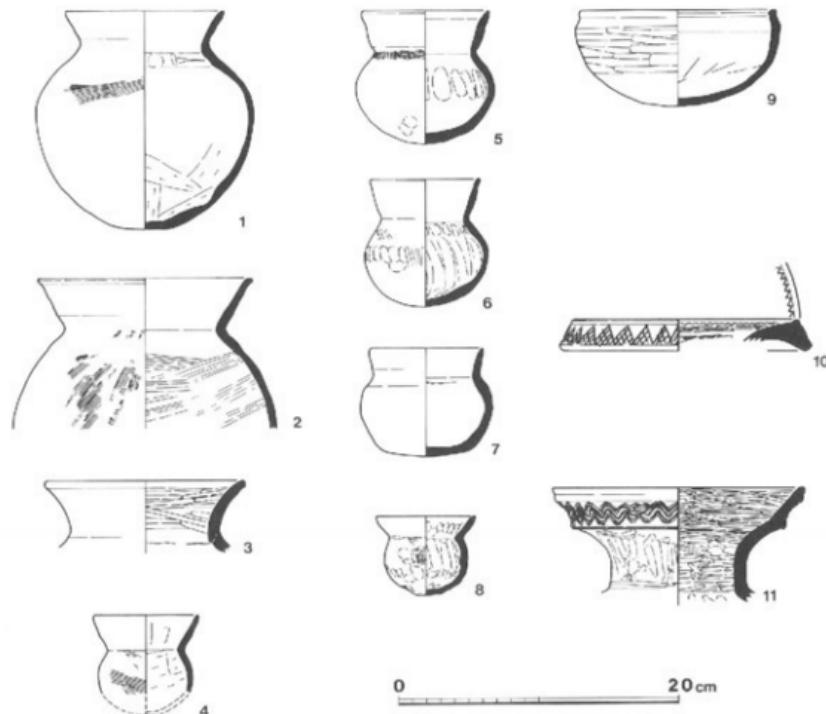


fig. 277 自然流路出土遺物

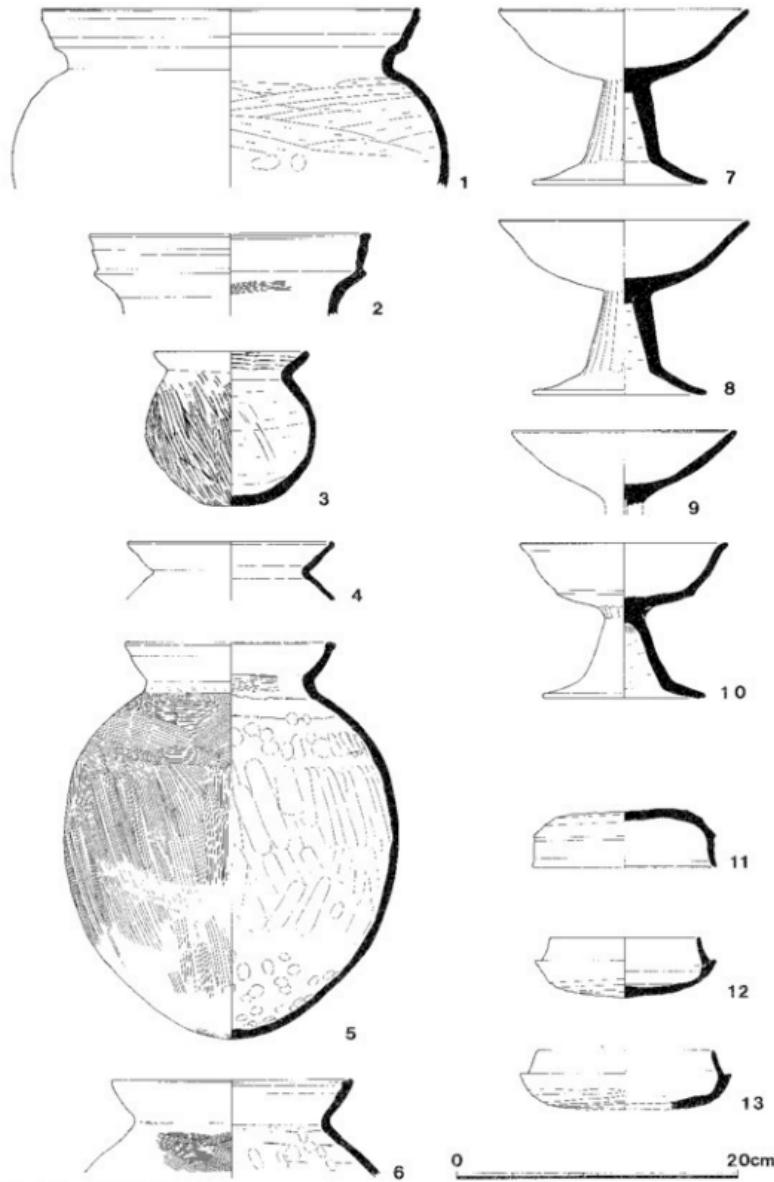


fig. 278 自然流路出土遺物

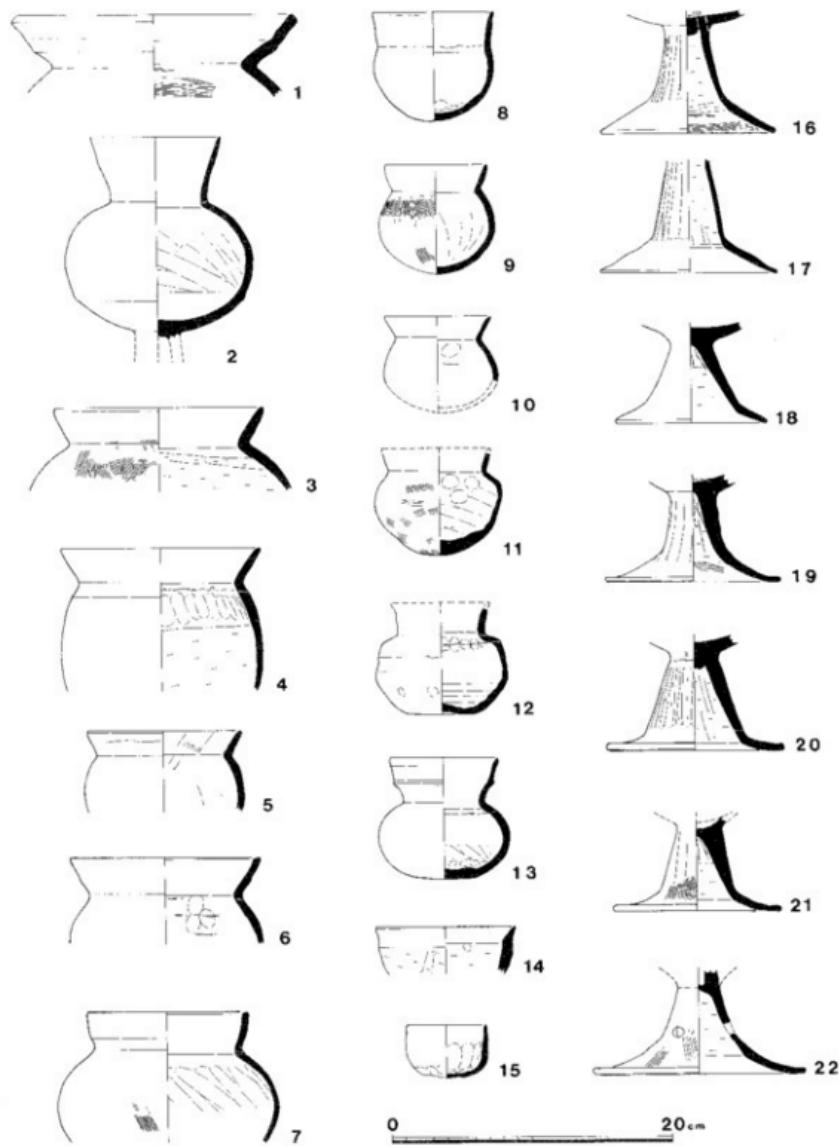


fig. 279 SX02出土遺物



fig. 280 S X02出土遺物



fig. 281 S X02土器溜り



fig. 282 S X02土器出土状況図

土器だまり 自然流路内の黒色砂礫層中で長さ約3m、幅約1mの範囲に多量の土師器と若干の須恵器が集中する箇所があった。

これらは出土の状況からほぼ同時期に投棄されたものと考えられる。

3. まとめ

今回の調査では遺構は少なかったものの重要な遺物、銅鏡片、韓式系土器等多く出土している。特に銅鏡は中国前漢代のもので、近畿では確実な出土例としては、大阪市平野区の瓜破北遺跡に次いで2例目である。破棄された時期は、包含層出土土器が細片であることから確実には断言できないが、弥生時代終末ないし古墳時代初頭と考えられる。4世紀代の古墳が集中して営まれるこの地域の古墳成立前夜の様相を知るうえで重要な意味をもつものと言える。

また、自然流路内から出土した5世紀代の土師器、須恵器及び韓式系土器は、出土した遺構の性格から層位的に編年を組み立てることは困難と思われるが、この時期のまとまった資料に極めて乏しい当地域では、大きな意味を持つ遺物と言うことができる。



fig. 283 自然流路・S X02出土土器

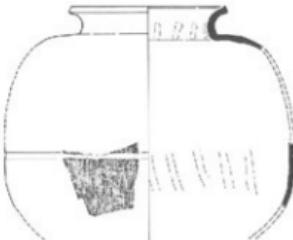


fig. 284 韓式系土器(自然流路) S = 1/6

もとやまちようひがしやま
20. 本山町東山遺跡—第3次調査—

1. はじめに

本山町東山遺跡は、神戸市東灘区本山町森字東山・西山にあり、昭和40年代の終りごろ、靈園造成工事予定として開発申請が提出された。昭和50年に神戸大学多淵敏樹教授、東洋大学附属姫路高校上田哲也教諭を中心とした調査団が編成され、開発予定区域内の試掘調査が実施された。

その後、開発計画は取り下げられていたが、昭和58年に前回試掘調査の結果をもとに、遺跡が密集している地域を保存区域にした宅地造成計画が提出された。

これに対して文化財課は、正確な遺跡の分布範囲を把握するため、昭和59年からトレンチ掘りによる遺跡の範囲確認を実施した。昭和59年度は6月から8月までと、10月から翌年1月までの2回にわけて調査を行い、今回の3次調査は、昭和60年4月8日から6月4日まで調査を実施した。



fig. 285 調査トレンチ位置図 1:5,000

2. 調査の概要

前回の1次・2次調査で西尾根が未調査となっていた。今回の第3次調査はこの範囲が調査対象地である。

尾根上に沿って南北にLライントレンチを設定し、約20m間隔でNo.44～No.59とNo.27ラインのトレンチを東西に入れた。また、No.27ライントレンチには、20m間隔で南北にE～Kまでのトレンチを設定した。今回の調査面積は、トレンチ幅1mで総延長1,037m²である。

土器棺墓(ST01) 標高約130mで、丘陵尾根が南に突出した先端から斜面にかかる肩部の地表下約15cmから土器片が密集して出土した。約1m角拡張した結果、土圧で押しつぶされているが、原形を保つ位置で土器棺と思われる弥生時代後期の壺1点を検出した。掘形は、径約50cm、深さはかなり削平されているらしく約20cmを測るのみであった。掘形の底には、自然石に混じって、おそらく意識的に敷いたと思われる握り拳大の石が平坦な状態で検出された。また土器の周りには土器を固定させるような人頭大の石が数石検出された。

土器は肩部より上は欠落していたが、残存高は38cm、胴部最大幅は36cmで底部にかけて急にすぼまっている。肩部より上は、埋納時に打ち欠いたのか、削平時に削り取られたのか不明である。また、土器内に他の遺物、骨類は皆無であった。



fig. 286 土器棺出土状況



fig. 287 土器棺取り上げ後

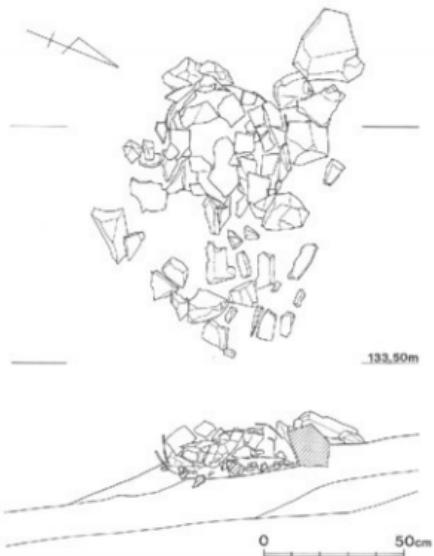


fig. 288 土器棺墓平面および断面図

- S K01 S K01土坑は、No. 27ライン尾根の東端で検出された。土坑の大きさは、東西径約1m、南北径約0.8m、深さ0.6mで土坑内には炭や灰が詰っていたが、壁面はまったく焼けておらず、また、遺物も皆無であり、時期・性格等については不明である。
- S K02 No. 27ライン尾根の付け根部で、やや南に降った所に検出された。トレンチ幅が1mのため、土坑の大きさは不明であるが、幅90cmの暗茶灰褐色砂質土を埋土とする土坑を検出した。この土坑は焼けた痕跡もなく、また、遺物も皆無であり、S K01土坑同様、時期・性格等については不明である。
- S B01 No. 57～No. 58間の斜面上に奥壁から1.3mの床面部を検出した。全面焼土で覆われていたが、周溝や柱穴は見あたらなかった。残存奥壁高は床面まで約40cmである。住居址内や周辺部から若干の弥生土器が出土している。
- (L ラインNo. 57
～No. 58) (L ラインNo. 57
～No. 58)

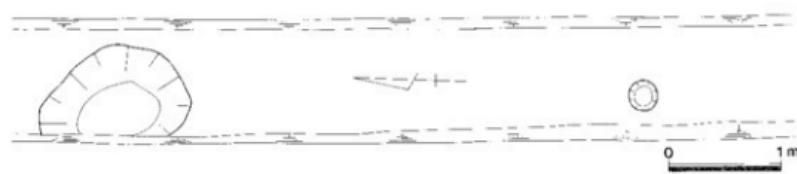
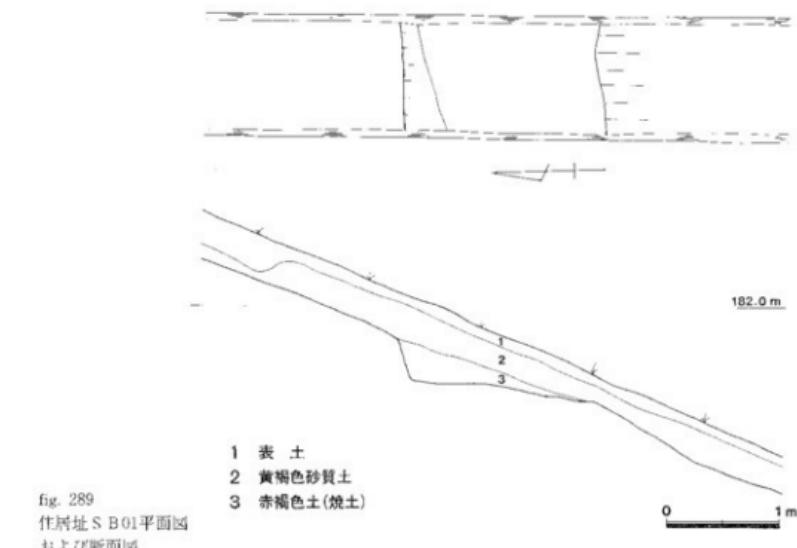




fig. 291 S K02 (K ライン)

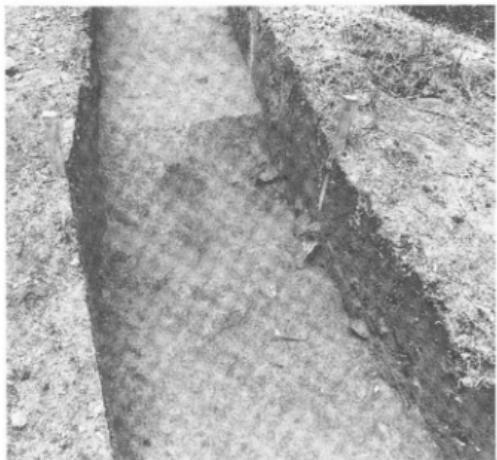


fig. 292 S B01 (L ライン No.57-58)

3. 出土遺物 今回の調査区からは器種が判別できる遺物の出土は少なかった。そのうち、No.58ラインの東側から出土した土器群は、頸部から胴部にかけての壺が判別できたのみである。しかし、口縁部と底部は欠損しており、時期・形態まで明らかにすることはできなかった。

弥生土器 前回の調査では船刀型石斧が出土したのみでサヌカイトは1点も出土していないが、今回の調査でNo.47ラインの西トレンチから質の悪いサヌカイトが1点出土した。大きさは、長さ9cm、最大幅4.7cmで、片方に若干調整した刃をついている。形態は不定形刃器と思われる。

4.まとめ 今回の3次調査で開発区城内の試掘は終了した。検出した遺構は、住居址4、墓（土器棺）1、土坑3、溝状遺構1である。調査は、すべて1m幅のトレンチ掘りのため、規模は不明であるが、標高180m等高線より上に住居址は集中し、墓域は、今回の調査で1基しか検出していないが、130m等高線ライン付近に営んでいる可能性が強い。

また、No.47ラインから石器が出土しており、試掘調査では、遺構を検出してないが、周辺部に遺構が存在していると思われる。

これら総合すると、東尾根は斜面が急峻で尾根もやせ尾根で遺構は存在しないと思われる。中尾根は、175m等高線ラインより下は斜面がきつく、遺構が存在する可能性は薄い。また、西尾根は、180m等高線ラインより上と、130m等高線ライン付近の比較的ゆるやかな尾根上付近に遺構が存在し、中間の斜面がきつい部分には遺構はないと思われる。

21. 山田・中遺跡

1. はじめに

山田・中遺跡は北区山田町中周辺にひろがる集落遺跡である。その営住時期は7世紀中頃から室町時代にわたるものと考えられる。山田・中遺跡は昭和58年度に実施した山田小学校校舎改築工事に伴う発掘調査において平安時代末期から室町時代初期の掘立柱建物2棟を検出したのが遺跡発見の端緒となった。昭和59年度に引き続き行った校舎改築工事に伴う調査においても、7世紀中頃の堅穴住居址1棟、平安時代末期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物7棟、土壙墓2基などが発見されている。

今回発掘調査を実施した県道三木・下谷上線予定地は、山田小学校校地の南約200mに隣接し、山田川左岸、山田町中周辺の河岸段丘にひろがる遺跡の範囲内に含まれると推定された。

調査は、三木・下谷上線道路敷工事に先立って施工予定の用水路部分(総延長370m、幅2.0m、一部拡張、総面積830m²)について実施した。

2. 調査の概要

調査地内の地区割は、道路敷地を横切る農道及び生活用道路を用いて区画割りを行いAからHまで設定した。

河岸段丘の裾付近にあたるA・Hトレンチにおいては、現地表下60cmまで耕作土・旧耕作土があり、地山直上に暗灰色砂質土の遺物包含層(厚さ30cm)が堆積している。包含層下の暗赤褐色粘質土及び褐色砂礫土層上面において溝・ピットなどが検出できた。河岸段丘高位にあたるD・Eトレンチにおいては、現地表下20cm~30cmで黄褐色粘質土の地山がみられる。

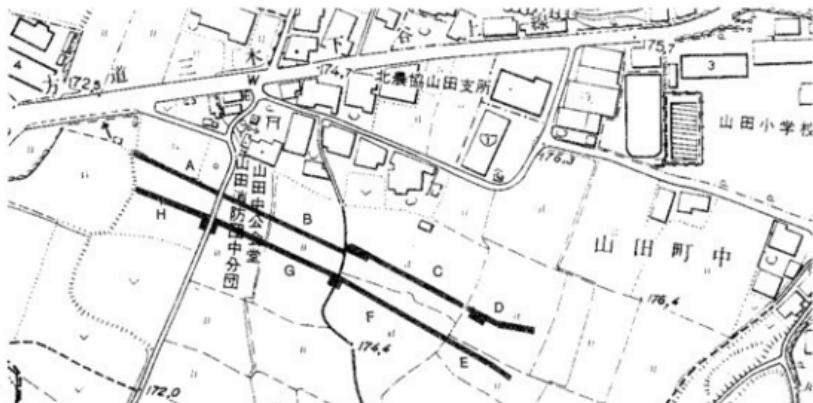


fig. 293 調査地位置図 1:2,500

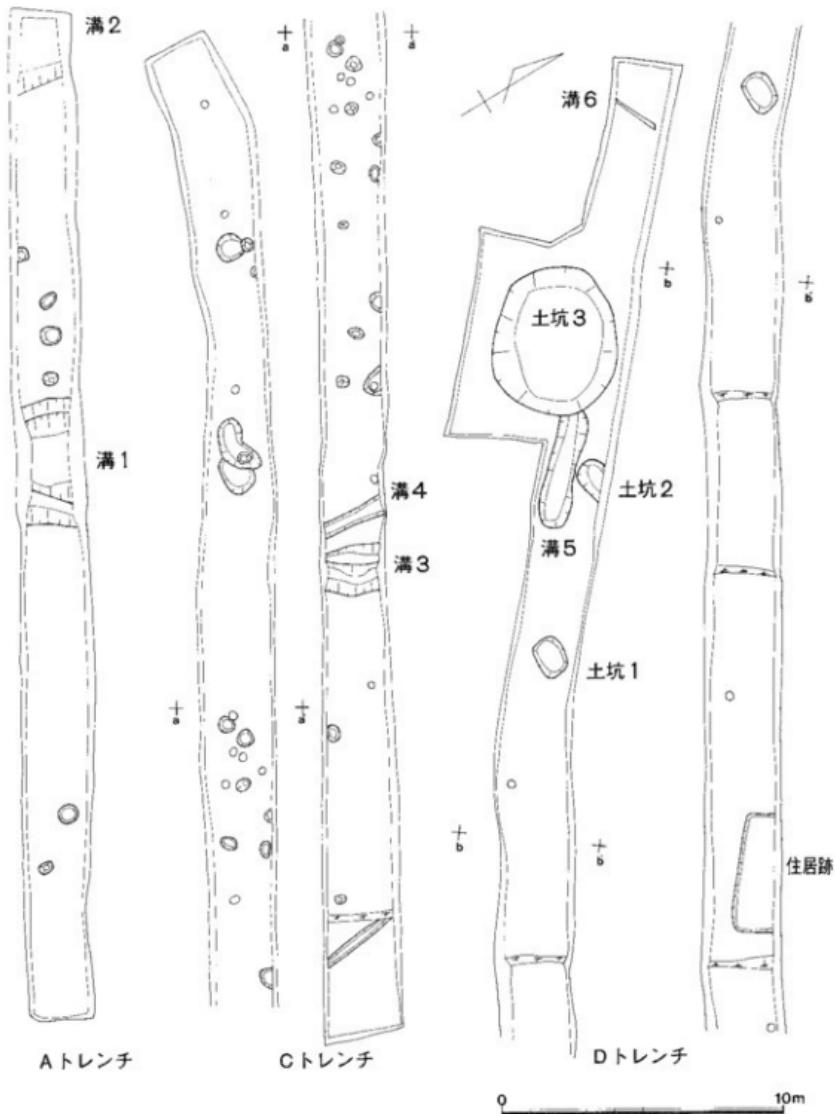


fig. 294 各トレンチ遺構平面図

A トレンチ

溝 2 条、ピット 6 か所を検出した。溝 1 は幅4.5m、深さ約1.0mを計測し、断面ロート状を呈する。埋土は黒灰色粘性砂質土で、上層部より弥生時代後期終り頃と考えられる土器片が多数出土している。溝 2 はトレンチ西端において一部を検出した。深さ20cm~30cmのU字溝で、溝肩で弥生時代後期の鉢形土器が出土している。ピットは径30cm~40cm前後の楕円形の平面形を呈し、建物としてのまとまりはない。埋土内より少量の土器片が出土している。

B トレンチ

地表下50cmで須恵器片を含む暗灰色砂質土を検出した。包含層下の黄褐色砂礫土層の遺構面では、12か所のピットを検出したが、建物としてのまとまりはない。

C トレンチ

地表下40cmで須恵器片を含む灰色砂質土があり、その下層の黄褐色砂礫土層を掘り込んで溝 3 条、ピット 20 か所、不定形土坑を検出した。

溝 3・4

溝 3 は幅1.4m、深さ0.46mで、断面V字状を呈する。埋土下層の淡褐色砂層内より古墳時代須恵器高环が出土している。溝 3 の西に隣接して溝 4 が検出された。幅60cm、深さ12cmを計測し、断面U字状を呈する。

ピット群は建物としてのまとまりではなく、いずれもピット内埋土は暗灰色砂質土である。

D トレンチ

堅穴状遺構

D トレンチ東部において工事中に堅穴状遺構を検出した。堅穴状遺構は黄褐色粘質土上面より掘り込まれる。堅穴の規模は一辺4.5m、深さ0.3m前後と推定される。周壁溝等の付属施設は検出されなかった。堅穴床面上から小型丸底壺、甕形土器片が出土している。

D トレンチ西部においては土坑3か所、溝 2 か所を検出した。



fig. 295 A トレンチ全景(東から)



fig. 296 D トレンチ溝 4 内土器出土状況

- 土坑 1** 土坑 1 は長径1.2m、短径0.9m、深さ0.15mの楕円形の土坑である。土坑内より弥生土器片が出土している。
- 土坑 2** 土坑 2 は長径1.1m、深さ0.3m前後の楕円形の土坑と考えられる。土坑内より弥生時代後期の土器片が折り重って出土した。
- 土坑 3** 土坑 3 は長径5.4m、短径4.4mの楕円形土坑で断面はレンズ状を呈する。土坑内埋土上層から須恵器片が出土している。
- 溝 4** 溝 4 は幅90cm、深さ20cmの断面 V 字形の溝である。西側は土坑 3 によって切られている。埋土内から弥生時代後期終り頃の壺形土器、甕形土器などが溝底に密着した状態で出土した。
- 溝 5** 溝 5 はトレンチ西端を横切る幅20cm、深さ 5 cm の溝である。埋土の灰色砂質土より土師器細片が出土している。
- その他、D トレンチではピット 5 か所が検出されたが、建物としてまとまるものはない。
- E トレンチ** トレンチ東部では、耕作土直下において黄褐色粘質土の地山になり、遺物包含層はみられない。この黄褐色粘質土面において溝 2 条、土坑 1 か所、柱列 2 か所、ピット 16 か所を検出した。
- 溝 6** 溝 6 はトレンチ東部を斜めに横切る幅50cm、深さ10cm前後の V 字形の溝である。一部のピットを切り、ピット群の時期より新しいと考えられる。
- 溝 7** 溝 7 はトレンチ西部の柱列 1 ・ 柱列 2 の間を横切る溝である。幅70cm、深さ 7 cm を計測し、断面 V 字形を呈する。埋土は灰色砂質土で、須恵器片が出土している。

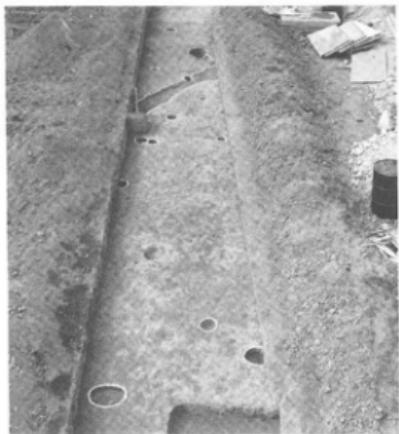


fig. 297 E トレンチ東



fig. 298 E トレンチ柱列 2

- 土坑4** 土坑4は1辺80cm、深さ40cmを測る隅円方形の土坑である。暗灰色粘性砂質土の埋土内からは、須恵器坏身片、土師器変形土器片が出土している。断面形は逆台形を呈する。
- 柱列1** 柱列1はEトレントのほぼ中央に位置する柱間寸法1.6m等間の建物の一部と考えられる。柱列の方向は北39°西にとる。柱掘形は直径40cmの円形を呈し、直径20cm前後の柱痕跡を残存させる。柱掘形の深さは40cmを計測する。柱掘形内より土師器片が出土している。
- 柱列2** 柱列2は西よりに位置し、トレント北壁に接して検出した。柱間寸法は1.6m等間で、柱列の方向は北55°西をとっている。柱掘形は直径30cm~40cmの円形を呈し、直径20cm前後の柱痕跡を残している。掘形の深さは40cm前後を計測する。掘形内より土師器片、須恵器片が出土している。
- Fトレント** Fトレントでは東端で竪穴住居址を検出した他、トレント中央部で溝2条を検出した。
- 溝8** 溝8は幅50cm、深さ21cmの断面U字形の溝である。埋土は灰色砂質土で上師器片が出土している。
- 溝9** 溝9は幅70cm、深さ20cm前後の断面U字形の溝である。溝内埋土は円碟と淡青灰色砂質土で、埋土内より土師質の羽釜片が出土している。



fig. 299 Fトレント東



fig. 300 Fトレント西

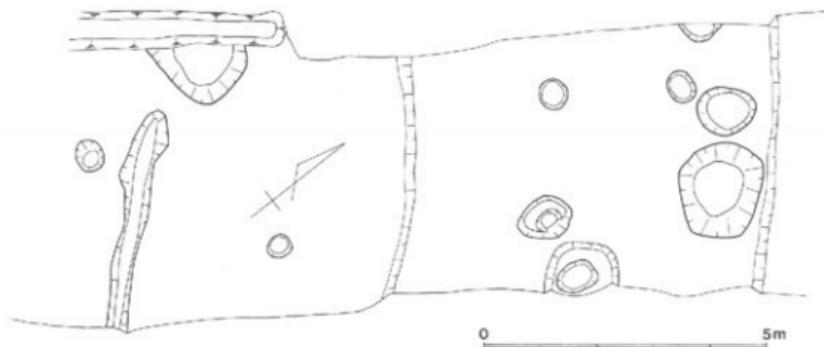


fig. 301 F トレンチ住居址平面図

豎穴住居址 豊穴住居址は、F 地区の東端で現状水田が畦畔によって画される位置で検出した。豎穴の東側は深さ25cmの壁体をつくるが、周壁溝は検出できなかった。一方、豎穴の西側は幅15cm、深さ5cmの周壁溝と考えられる溝を検出した。溝の北側には、焼土と灰層を含む浅い土坑がみられ、竪と推定される。調査範囲内では住居址の床を残存させる部分は東側2.2mにすぎず、土師器片、須恵器壺蓋1点が出土している。住居址の支柱については不明である。以上の検出状況から、1辺4.5mで西辺に竪をつくりつける方形プランの豎穴住居址と考えられる。



fig. 302 F トレンチ土器出土状況



fig. 303 F トレンチ住居址

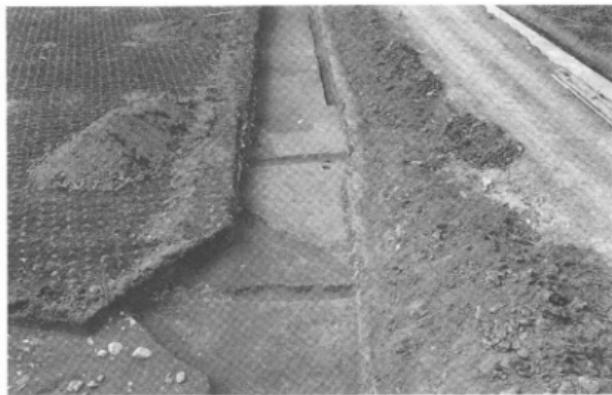


fig. 304

G トレンチ全景

G トレンチ

耕作土下に灰色粘性砂質土、暗褐色粘質土が順次堆積し、須恵器、土師器片が出土している。地山である淡褐色砂質土の上面では、遺構は検出されなかった。

H トレンチ

耕作土の下に灰色粘性砂質土・暗褐色粘質土が順次堆積し、奈良時代須恵器环身が出土している。遺構面となる淡褐色砂質土上面で溝1条を検出した。

溝10は幅80cm、深さ10cmの断面U字形の溝である。

3.まとめ

今回の県道三木・下谷上線予定地内における発掘調査においては、弥生時代の遺構・遺物、古墳時代の遺構・遺物と奈良時代から鎌倉時代にかけての出土遺物を見た。

D・A トレンチで検出した溝1・2・4、土坑1・2は、出土した弥生土器から弥生時代末期に相当する時期の遺構と考えられる。E・F トレンチで検出した竪穴住居址、土坑4は出土した須恵器の形態から古墳時代後期前半に相当する時期の遺構と考えられる。調査区域全城にみられた柱列及びピット群については、時期を確定できる資料を得られなかつたが、およそ古墳時代～中世にいたる集落の一部をなすものであった可能性がある。

北区山田町域における弥生時代・古墳時代の遺物の発見は、山田小学校における調査で石鏸、弥生土器片が発見された例と、箱木千年家下層における古墳時代須恵器环蓋の出土があるにすぎない。今回調査における、弥生時代・古墳時代の遺構・遺物の発見は、当地域において最初のものといえる。山田・中遺跡周辺には古墳の分布はなく、弥生時代末期にあたる遺構検出ともあわせて、山田町域における古墳文化の形成を考えるうえで、今回の調査は大きな問題をなげかけたといえる。

22. 上津遺跡

1. はじめに

県道西脇三田線の車道拡幅及び歩道設置工事に先立ち、工事区間の約3,000m²について試掘調査を行った。この結果、20か所の試掘坑の内、12か所において中世の遺物包含層が確認されたため、約850m²について、発掘調査を実施した。

調査地区は、武庫川の支流である長尾川の南岸に位置し、南北を丘陵にはさまれた東西方向に細長くひろがる沖積地に立地している。

周辺は、長尾地区県営圃場整備事業等に伴い、試掘調査が行われ、鎌倉時代～室町時代の上津遺跡の存在が確認されている。

今回の調査地も、この上津遺跡の一部と考えられ、鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物址1棟と溝6条、ピット多数等が見つかっている。

2. 調査の概要

土層の基本層序は、耕土25cm～30cm、床土5cmで、地表下約25cm～60cmで鎌倉時代～室町時代の須恵器、土師器を含む淡褐色粘質土層に至る。これから下は、人力による掘削を実施した。

また、調査区名は、西側から順に、A地区、B地区、C地区、D地区、E地区とした。



fig. 305 調査地位置図 1:10,000

- i) A 地区 工事区間の西端、幅 1 m ~ 5 m、全長約 80 m で約 200 m² の範囲である。
 鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物址 1 棟、溝 3 条、土坑 2 基の他、ピットを多数検出した。
- S B01 A 地区のはば中央で検出された掘立柱建物址で、現状では南北 2 間、東西 2 間を確認しており、南北 5.0 m、東西 4.6 m、南北軸の方向は N 34° E を測る。柱穴は径 25 cm ~ 35 cm、深さ 30 cm ~ 35 cm で、柱穴間の芯々距離は 2.3 m ~ 2.5 m を測る。柱穴埋土内より、須恵器、土師器片が出土している。
- S D01 S B01 の北側から西側にかけて、L 字形にめぐる溝状造構で、幅 20 cm ~ 45 cm、深さ 10 cm ~ 15 cm を測る。埋土内より、鎌倉時代～室町時代の須恵器小皿の他、須恵器、土師器等が出土している。S D01 は、S B01 に関する雨落ち溝である可能性が考えられる。
- S D02 S D01 の内側約 1 m に位置する南北方向にのびる溝状造構で、幅 20 cm ~ 50 cm、深さ 10 cm ~ 15 cm を測る。埋土内より、鎌倉時代～室町時代の須恵器、土師器等が出土している。
- S D03 A 地区の東側で検出された東西方向にのびる溝状造構で、幅 3.0 m ~ 4.0 m、深さ 20 cm ~ 60 cm を測る。埋土内より、須恵器・土師器片が出土している。
- S K01 A 地区の西端で検出された方形の落ち込みで、南北 1.5 m 以上、東西 8.0 m、深さ 5 cm ~ 10 cm を測る。埋土内より、須恵器・土師器片が出土している。
- S K02 S K01 のすぐ西側で検出された梢円形の土坑で、長径 160 cm、短径 80 cm、深さ 15 cm を測る。遺物は出土しなかった。
 また S K01 のすぐ東側で、造構面が全体的に 5 cm ~ 10 cm 程、一段下がっており、それから東へ行くにつれて緩やかに低くなっている。

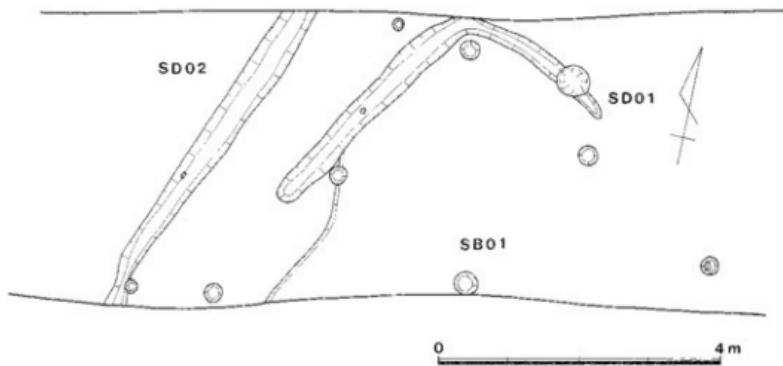


fig. 306 A 地区建物址 (S B01) 平面図

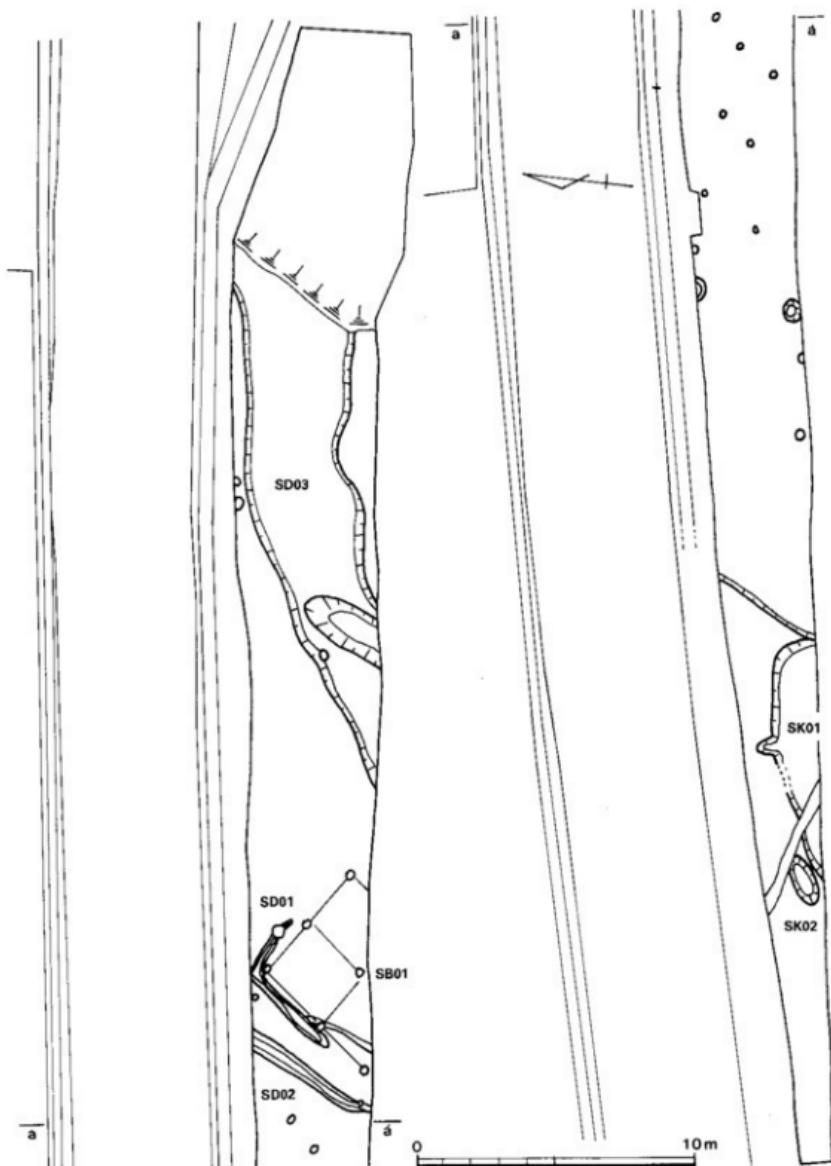


fig. 307 A トレンチ平面図



fig. 308 A地区(東から)

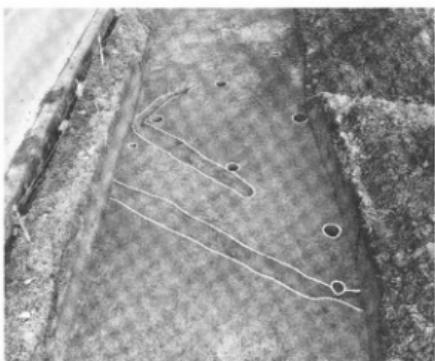


fig. 309 A地区 S B 01

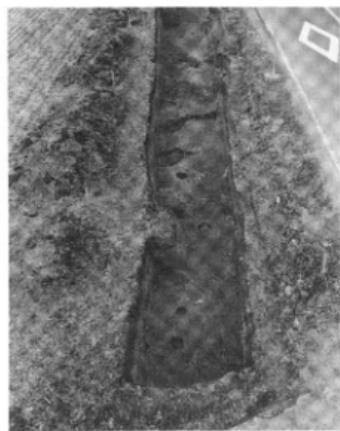


fig. 310 B地区



fig. 311 B地区遺構検出状況

ii) B地区

A地区的東方は、長尾川の一支流が流れる細い谷状地形であり、田園の耕土上面でも約1m～3m A地区よりも低い。

A地区的東端から、東へ約300mの区間にかけては、この支流の氾濫原で、遺物包含層も途切れている。

B地区は、この谷をはさんでA地区的東側、幅2m～3m、全長約90mで約230m²の範囲である。

B地区においてはピットが多数検出されているが、建物としてまとまる可能性のあるものはほとんどない。

遺構としては、溝1条、上坑4基、段状遺構等が検出されている。

遺物は、鎌倉時代～室町時代の須恵器塊・壺、土師器小皿・壺等が遺構埋土内及び遺物包含層より出土している。

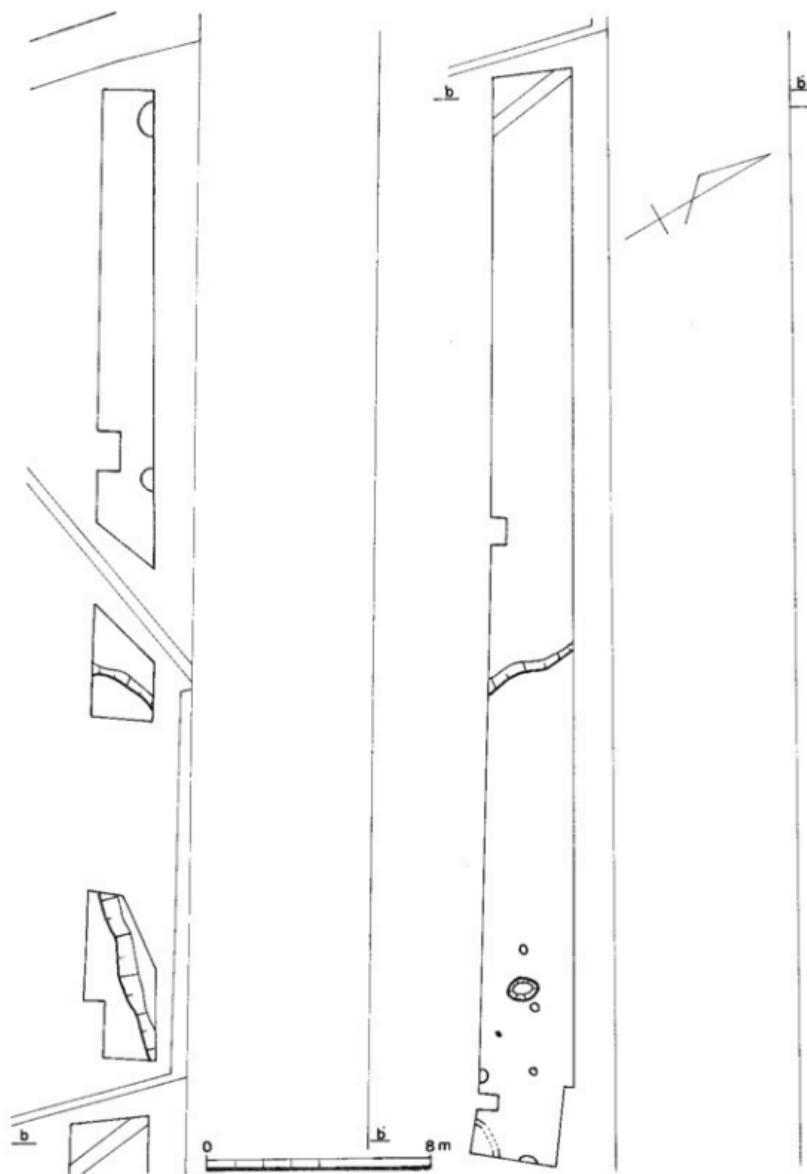
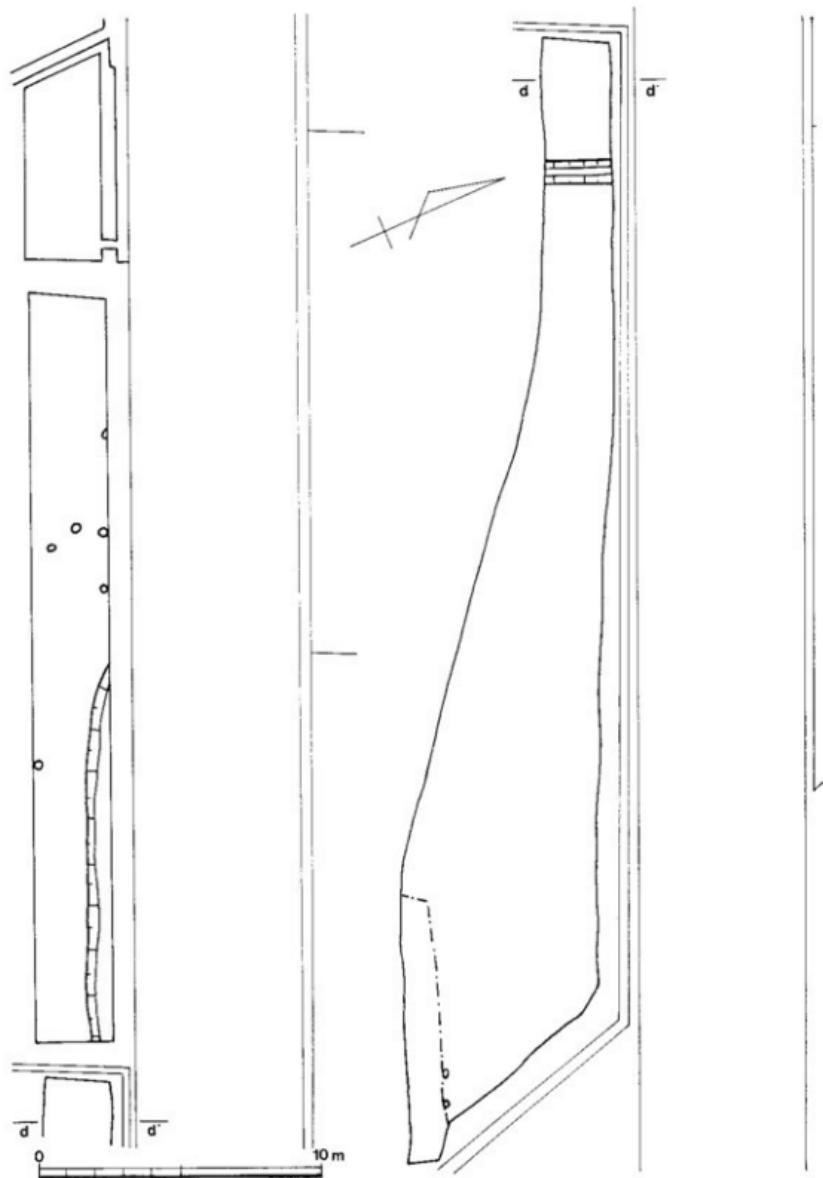


fig. 312 B地区平面図



- iii) C地区 B地区の東方、幅2m~4m、全長30mで約95m²の範囲である。近世以降~現代にかけての暗渠及び攪乱坑の他は、遺構は全く検出しなかった。
遺物は、包含層から、鎌倉時代~室町時代の須恵器・土師器が少量出土している。
- iv) D地区 C地区の東方、幅2m~4m、全長約100mで約280m²の範囲である。鎌倉時代~室町時代の溝2条とピットが7か所で検出されている。
遺物は、遺構埋上内及び遺物包含層から、鎌倉時代~室町時代の須恵器・土師器片が出土している。
- v) E地区 D地区的東方、幅1m~2m、全長約40mで約45m²の範囲である。遺構は全く検出しなかった。
遺物は、包含層から、鎌倉時代~室町時代の須恵器・土師器片が少量出土している。



fig. 314(上) E地区(東から)



fig. 315(右上) C地区(西から)



fig. 316(右下) C地区(東から)



fig. 317 D地区(西から)

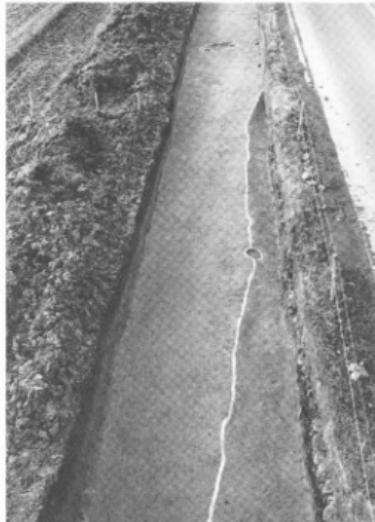


fig. 318 D地区(東から)

3. 出土遺物 遺物は、A地区～E地区にかけて、コンテナ1箱分出土したが、いずれも細片が多く、図化できるものは数点にすぎなかった。

須恵器では、壇・鉢・壺・壺等があり、土師器では、小皿・壺等がある。時期的には、細片が多く判断しにくいものが大半であったが、おおよそ、鎌倉時代～室町時代にかけてのものが中心である。



fig. 319

出土遺物実測図

1 A地区 SDO 2

2 A地区 SDO 1

3・4 B地区 包含層

4. まとめ 今回の調査は、調査区が細長いため、検出した遺構の規模等を明確に把握するには至らなかったが、少なくとも、上津遺跡における中世の遺物包含層の拡がりを明らかにするうえにおいて、非常に重要な知見を得た。

なかでも、A地区は、遺物包含層も厚く、遺構も比較的集中する地域である。また、掘立柱建物も確認されており、この周辺に中世の集落が存在した可能性をうかがわせる。

今後、周辺地域の圃場整備等に伴う調査によって、遺跡の全容が明らかになって行くことであろう。

23. 北神ニュータウン内遺跡

北神第4地点遺跡

1. はじめに

北神第4地点遺跡は、前年度に引き続いてニュータウン建設に伴う工事の事前調査として、II-15~22地区・I-06~13地区の2か所を、本年度の調査対象地とした。

前年度の調査及び試掘調査の結果より、本年度調査対象地にも弥生時代の遺構・遺物の広がりが予想された。また、II-20・21地区では試掘調査の際に室町時代の土師器の鍋が出土しており、II地区では室町時代の遺構・遺物の検出も予想された。

2. 調査の概要

(1) II-15~22地区 標高207m前後の尾根上に位置しており、この尾根には、室町時代に約400m東にある松原城に関わる砦や城が置かれたとされるところで、試掘調査の結果よりも、関連遺構・遺物の存在が予想された。

調査は、尾根の平坦面と緩斜面について行った。全体に造構面(地山)までは浅く約0.2~0.3mで、明瞭な遺物包含層は形成されていなかった。基本層序は、第1層(表土層)・第2層(黄灰色粘質土層)・地山となっている。

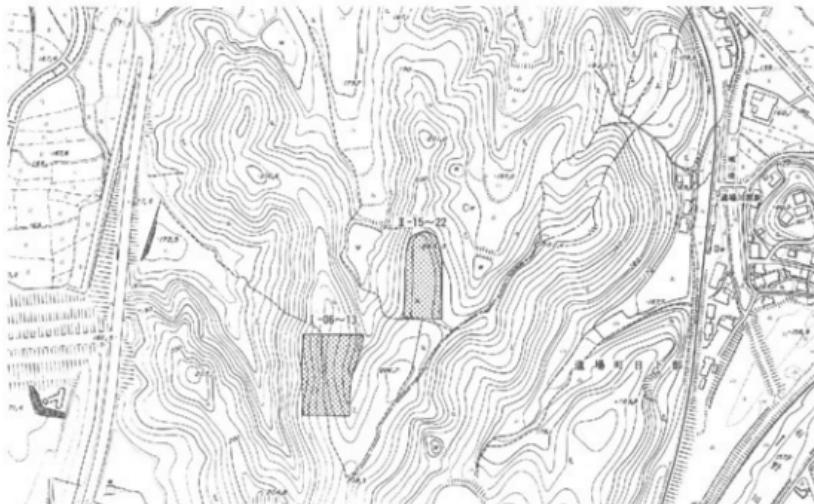


fig. 320 第4地点遺跡調査位置図 1:5,000

遺構

遺構は調査区のほぼ全域にわたって確認され、そのほとんどが不定形な浅い落ち込み状のものと土坑で、他に段状遺構2基と掘立柱建物址1棟が確認された。

落ち込み状のものと土坑については、その用途・時期については遺物も少なく不明である。段状遺構は、どちらも地山を掘りこんだ長さ6~7m、深さ0.2~0.3mの浅い溝状を呈するもので、遺物の出土もなく、その時期・性格とも明らかにすることはできなかった。しかし、このような段状遺構は、弥生時代の高地性の遺跡によく見られるもので、この段状遺構も弥生時代の可能性が高いものと考えられる。



fig. 321 II-15-22地区全量(北から)

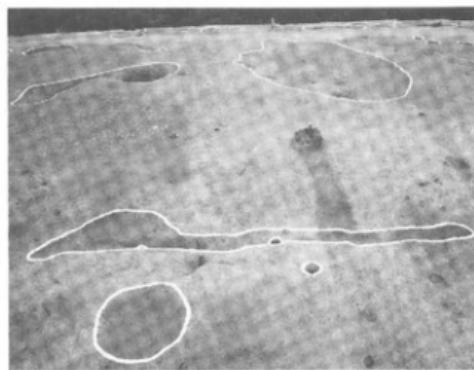


fig. 322 段状遺構

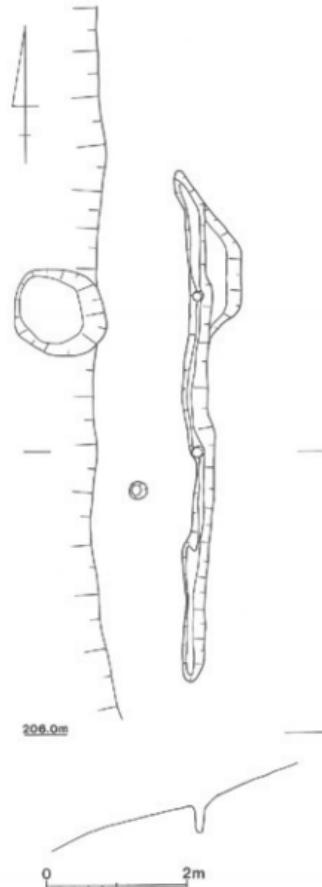


fig. 323 段状遺構実測図

掘立柱建物址は、3間×2間（柱間1.5~1.75m）の小形の建物址で、長軸がほぼ尾根と平行になるようになっている。柱の掘形は、ほぼ円形で直径0.3m前後、深さ0.2m前後のものである。この建物址に伴うと考えられる遺物は確認されなかった。

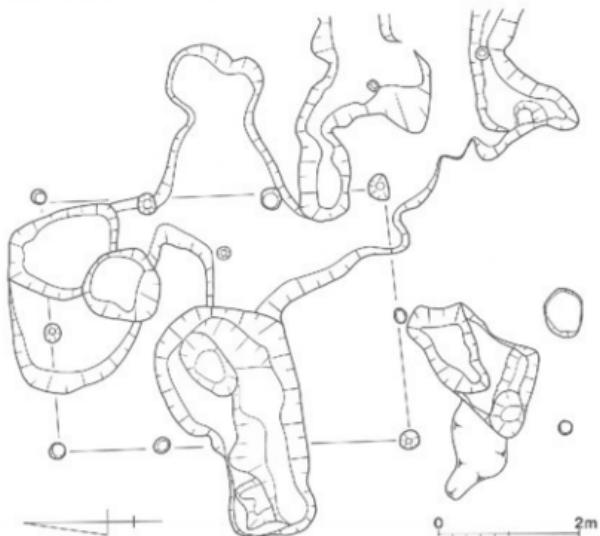


fig. 324
掘立柱建物平面図

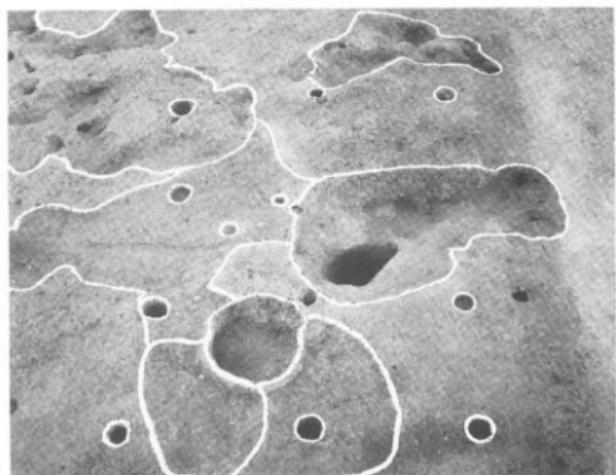


fig. 325
掘立柱建物(北から)

遺物

遺物の出土量は少なく、表土層直下よりの出土が大半であり、遺構内からの出土はほとんどなかった。出土遺物は、若干の弥生土器を除けば他は土師質の皿が多く、中には、口縁部にススが付着し、澄明皿として用いられたと考えられるものも含まれていた。また、皿の内面にハケ状の痕跡をとどめているものが多く、地方色の1つと考えられる。

時期は、弥生土器では小片が多く、細かな時期を決め得ないが、中期後半ごろのものと考えられる。土師質の皿についても、同様に決め難いが、室町時代ごろのものではないかと考えられる。

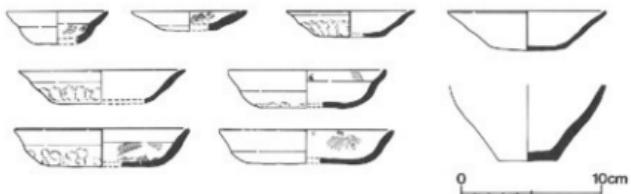


fig. 326
II-15-22
出土土器実測図

(2) I-06~13地区 前年度の調査区の南へ続く標高209m前後の尾根で、調査は尾根の平坦面及び緩斜面を対象として行った。基本層序は、II地区と同様であるが部分的に第3層が存在する。ここでも、明瞭な遺物包含層は形成されておらず、遺構面（地山）までも浅く、0.2~0.3mほどである。また、西側斜面では、地すべりの痕跡がみられるような急斜面があり、遺構・遺物はほとんど確認されなかった。

遺構

遺構は、主に尾根の平坦面付近において確認され、住居址2基の他、土坑等があった。住居址は、調査区の北端と南端で確認されたものである。



fig. 327
I-06~13地区
(南から)

S B 04

S B 04は、径5.6~6.3mの東西にやや長い円形竪穴住居址である。西側の周壁は流出しており、わずかに周溝の底が認められるだけであった。柱穴は6本確認されたが、ほぼ正方形になる4本が主柱穴で、あと2本は支柱と考えられる。そして、その主柱穴のほぼ中央に、中央土坑とそれに付随する土坑があり、埋土にはかなりの炭が含まれていた。

時期については、この住居址からは遺物がほとんど出土していないということもあって、明確にすることはできないが、前年度調査区の出土遺物が、弥生時代中期末（第Ⅳ様式）であることや遺構の連続性を考え合わせると、同時期の弥生時代中期末（第Ⅳ様式）ごろと考えられる。

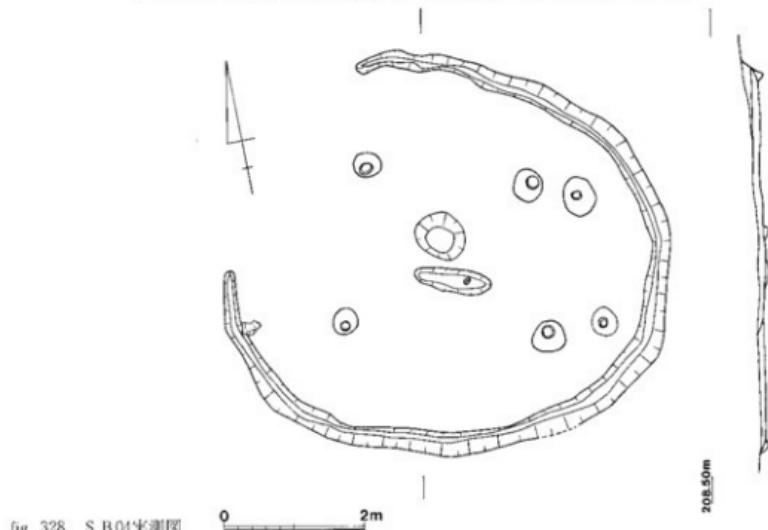
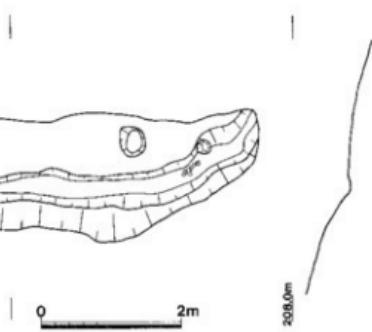


fig. 328 S B 04実測図

0 2m

208.50m

fig. 329 S B 05実測図



0 2m

208.60m

S B 05

S B 05は、現存長6.2m×1.5mで、すでにその半分以上が流出してしまっている。よく高地性の遺跡にみられる段状遺構に似ているが、ここでは住居址と判断された。柱穴や中央土坑等は、全く確認されなかつたが残存する周溝内には焼土・炭等が含まれていた。

時期は、周溝内より、凹線文を巡らした短頸壺が出土していることより、弥生時代中期末（第IV様式）と考えられる。

土坑

土坑は長径1～2m、深さ0.4～0.5mのものが大半を占めるが、遺物の出土はほとんどなく、時期やその性格については明らかにし得なかった。



fig. 330
S B 05と土坑

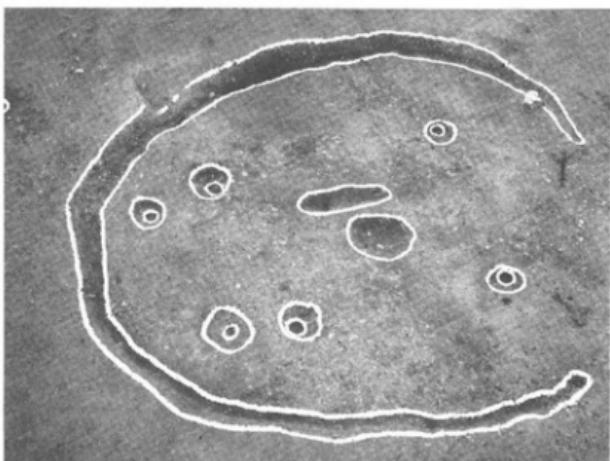


fig. 331
S B 04

遺物

遺物の出土量は多くなく、そのほとんどが第2層からの出土であった。この層からは、弥生時代中期末（第IV様式）の土器が出土している。また、表土直下からは、奈良時代の須恵器（环蓋等）が出土したが、それに伴うような遺構の存在は確認されなかった。遺構から出土した遺物については、SB04では細片が多く図化できるものは1点もなかったが、中央土坑より出土した高環脚部片等より、弥生時代中期末（第IV様式）のものと考えられる。SB05も局溝内の短頸壺等より、すでにみたように弥生時代中期末（第IV様式）のものと考えられる。そして、この2基の住居址では、この時期の住居址では一般的に含まれている石器類が1点も確認されていない。また、調査区全体を通して、石器類はほとんど確認されなかった。

3.まとめ

今年度の調査の概略をみたが、その結果についてまとめてみると、まず昨年度同様に竪穴住居址の確認をあげることができる。しかし、昨年度調査の住居址が弥生時代後期のものであるのに対し、今回の住居址では後期の遺物は認められず、また、約300mもはなれた地点であることや、排水溝等の内部構造の違いなど、種々の点で異っている。これが時期差に起因するものなのか、今回は明確にできなかったが、今後この付近の弥生時代中期末～後期の集落址調査の増加を待って再検討してみる必要があろう。

次に室町時代ごろの遺物の出土をあげることができる。文献等にあるように、松原城に関係する何らかの施設が、存在したことを行うかがわせるもので注目される。しかし、調査で確認された掘立柱建物址は、その時期を決定し難く、その関連性については明確にすることができなかった。

このように第4地点遺跡は、弥生時代を中心にして、それ以後にも幾度か生活の場となっていることが判明した。そして、弥生時代の住居址は計5基となり、未調査部分にも住居址が埋もれていることは、試掘調査で明らかであり、北神地域では有数の大集落を形成していたものと考えられる。

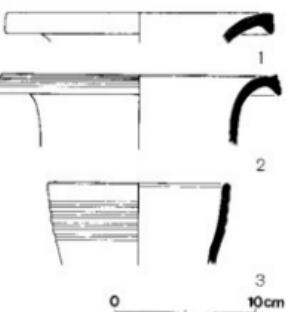


fig. 332 I-06~13出土土器実測図
1・2 第2層 3 SB05

北神第5地点遺跡

1. はじめに

分布調査時に加工石材が谷状地形内に存在したことから、石材採掘址であろうと予想されていた。昨年度の試掘調査で矢鉄20数点が出土したことから、石材採掘址であることが確認された。しかし、その操業時期については、明らかにし得ず、近世に属するものであろうという程度に止まった。なお、隣接する第6地点についても、昨年度の試掘調査で石材採掘址であることが確認されているが、造成工事を受けない部分であることから、全面調査は実施しなかった。

2. 調査の概要

当地点の地形は、尾根筋から落ちる急斜面と、それにつづく狭い谷状の窪みからなる。その谷状の窪みの底に33cm×33cm×170cmの直方体の加工石材が存在する。その加工石材の両側数mについては、昨年度検出済で、それより東について今回調査を実施した。

石材採掘址

尾根筋から落ちる急斜面は、崩壊した多量の土砂で採石面が埋没しているものであった。それらの土砂を取り除くと、尾根筋からほぼ垂直に落ちる面が検出された。その高さは8.5mで、上部3.8mは土で、その下部は、凝灰質砂岩である。垂直な凝灰質砂岩の面は、採石時の凸凹をそのまま残しており、一回に切り取られた石の幅を表わしている。しかし、この幅は、規則的なものではなく、岩盤が本来有する節理方向や幅に従うものである。

垂直に落ちた面から谷側に向ってほぼ水平に凝灰質砂岩の面が約20mづき、再び垂直に落ちる。水平に切り取られた岩面上には、土砂とともに採石時に生じた多量の石屑が堆積していた。その厚さは、2~4mで、採石の労働量の多さを物語っている。この土石は、尾根筋側から谷側に向けて積まれたものである。すなわち、谷側から尾根側に向って掘り進み、切り取った後にできる水平な面に土石を捨て、積み上げたと考えられる。従って、採石時は、切り取り面からわずかばかりの空間をおいて、後ろは上石の山になっていたと考えられる。

放置されていた加工石材のすぐ東側には、水平に切り取られた面から更に、1.6m（加工石材が放置された面からは、4.0m）ばかり円形に深く切り取られている。この部分には、他とはやや質の異なった堅ちな凝灰質砂



fig. 333 調査位置図 1:5,000

岩が認められ、それを求め深く掘り進んだと推測できる。

最も深く掘り込まれた部分付近では、切り取られた岩盤上に幅1m程度の黒色の腐植土の堆積がみられる。それは、捨てられ積まれた土石の上を凹ませて造られたスロープに続いていたようである。水平な切り取り面上のそれは、深く土中にあったが、スロープは、尾根を下り有野川岸までつづいている。これは、後述する馬の踏鉄の出土と考え合わせると、石材運搬用の道であったと考えられる。



fig. 334
調査地全景(東から)



fig. 335
調査地全景(北から)

矢穴

水平に切り取られた岩盤の直上、あるいは10~20cm浮いた状態で矢鉄等が約60点出土した。昨年度の試掘調査時に出土したものと合わせると80点を超える。矢鉄は、いうまでもなく岩塊を打ち割るときに用いたもので、直線に並べあけられた矢穴に差し込み、玄能で打ち込む。矢穴は、8ヶ所29個を確認した。その大部分は、水平方向に打ち割る際に設けられたもので、約1mの間に8個を並べたものが最も長く、矢穴の芯々で11.5~14.5cm間隔であけられている。

矢穴は、台形で、入口の幅5~7cm、奥幅3~3.5cm、深さ4~5.5cmである。垂直方向に打ち割る際の矢穴も同程度の大きさである。割り切れず残された矢穴は、縦割り用のものが、入口で1.8~2.0×5.5cmの長方形で、深さは3.0~3.5cmである。

矢鉄

矢鉄は、直方体を面取りした六角柱の鉄素材の一端を叩き延ばし、徐々にその厚さを減じ先端部を形成するが、鋭い刃部は作らず平坦にしている。今回出土した60余点のうち全形を知り得る55点は、矢鉄とノミに大別でき、矢鉄はその大きさから2類型5種に、ノミは形態と大きさから2類型3種に分類できる。

矢鉄は、先端部で石を割るものではなく、厚みで矢穴を押し広げるよう使用するものであるから、分類は、その厚さと打ち込んでいく分の長さを規準に行わなければならない。その規準とすべき厚みは、残された矢穴から知ることができる。完全に残された矢穴は3個存在し、縦割りのためのものである。その入口部の大きさは、先述のとおり1.8~2.0×5.5cmであるから、縦割り用の矢鉄は厚さ2.0cmより厚くなければならない。横割り用の矢穴で完存するものはないが、割り残された半分はすべて数mmで、元は1.5cm前後の厚みがあったと推測できる。また、打ち込まれた状態で縦割り用1点、横割り用4点が出土しているものも参考にすると次のように分類できる。

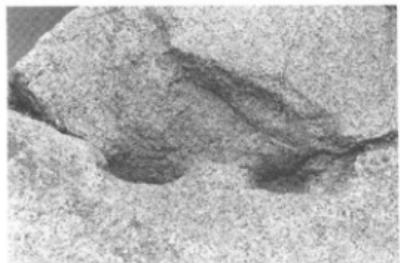


fig. 336 縦割り矢穴

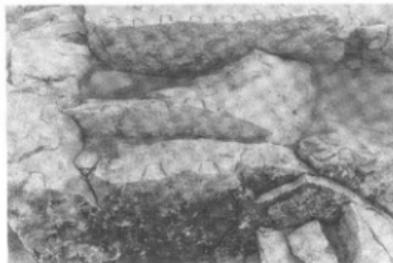


fig. 337 横割り矢穴

A類



A I



A II

B類



B I



B II



B III

A類は、大割り（採石）用で、A I類は、その縦割り用（ブツケ）、A II類は、その横割り用（スカイ）である。いずれも割り取ろうとする岩塊に亀裂が入ってから割り切るまでの打ち込みに必要な最も厚い部位から頭頂部にかけて2.0～3.0cm前後を有する。

A I類—先端部幅3.0cm、長さ（推定）8.0～9.0cm、最も厚い部位3.0cm以上。

A II類—先端部幅2.7cm、長さ（推定）6.0～8.0cm、最も厚い部位2.0cm以上。

B類は、小割り用で、A類と全く形態を異なる点は、最も厚い部位が頭頂部にあることである。石材は、すでにどの面も岩盤についていないから、亀裂が入ると同時に打ち込みの必要がなかったからであろう。

小割りされた石材に残された矢穴の形態は、大割り（採石）時のそれと同様であるが、大きさは、入口部の幅2.5～3.5cm、奥部の幅1.5cm、深さ2.5cmと小型である。B類に分類した矢鉄は、いずれも小型で、矢穴の大きさと対応する。しかし、先端部幅、長さで分けた3種類の使い分けは不明である。

B I類—先端部幅2.0～2.5cm、長さ（推定）4.0～5.0cm、最も厚い部位2.0cm以上。

B II類—先端部幅1.3～1.6cm、長さ（推定）5.0cm前後、最も厚い部位1.6cm以上。

B III類—先端部幅1.5～1.7cm、長さ（推定）4.0cm前後、最も厚い部位1.5cm以上。

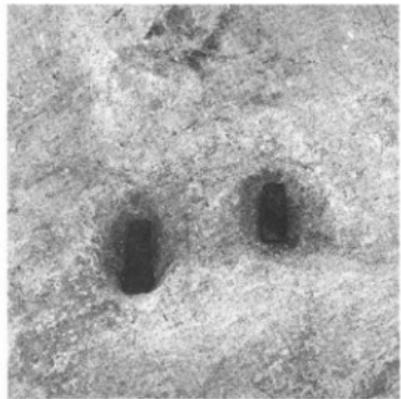


fig. 338 横割り矢鉄出土状況

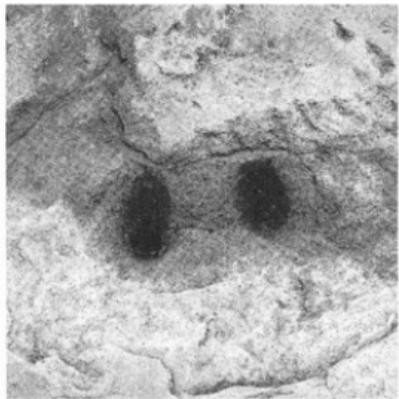


fig. 339 横割り矢鉄出土状況

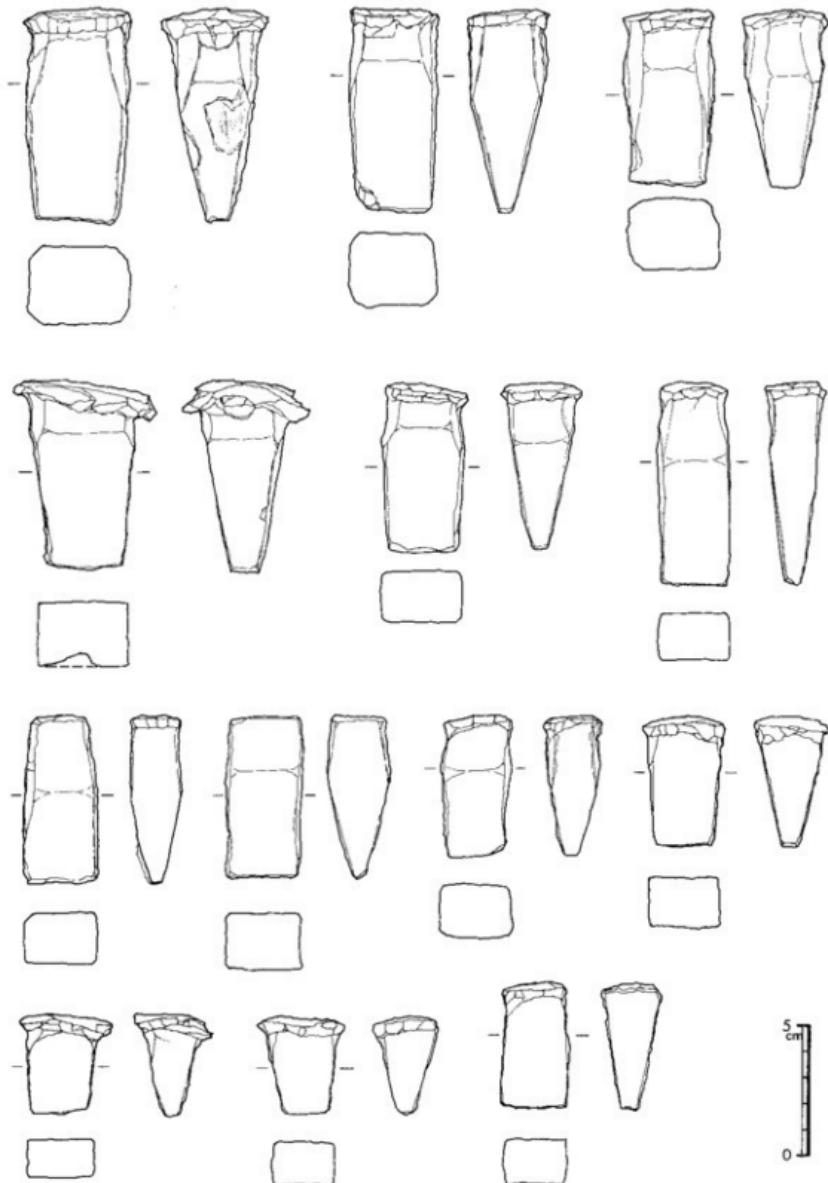


fig. 340 矢鉄尖測圖

5
cm
0

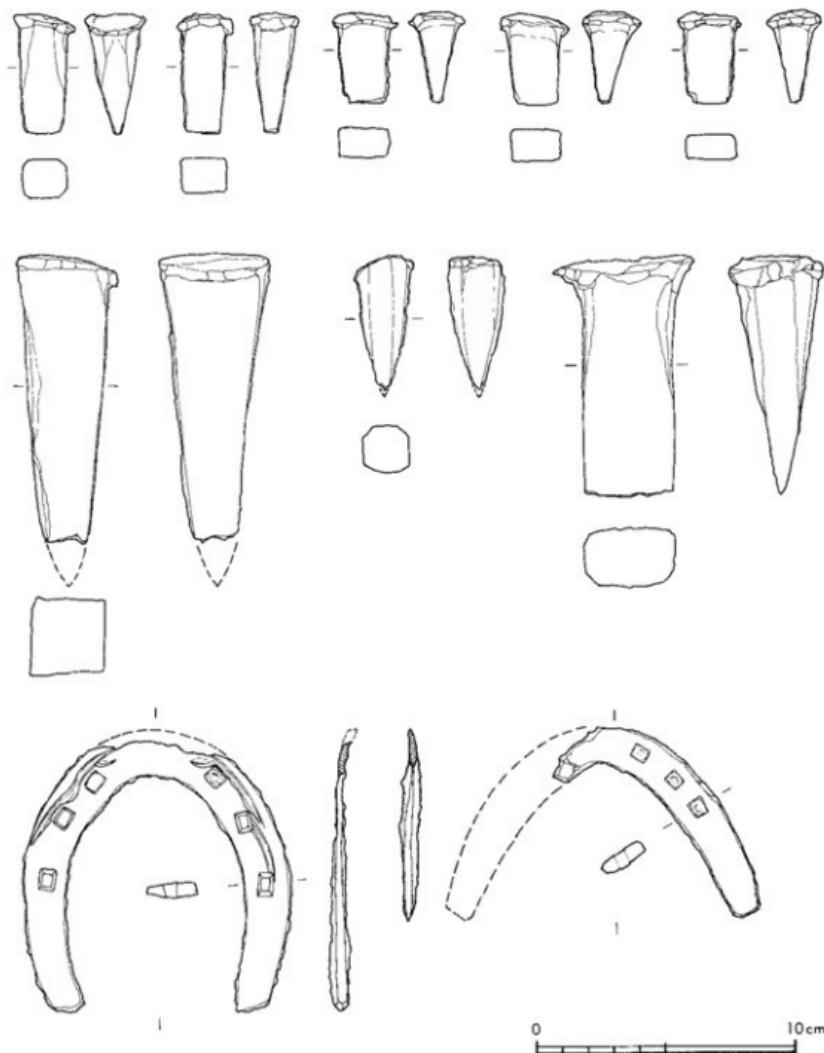


fig. 341 欠鉄・ノミ・蹄鉄実測図(上：欠鉄 中：ノミ 下：蹄鉄)

ノミ

ノミと考えられるものが3点存在し、その形態から2種類に分類できる。A類は、先端を鋭くした四角錐ないしは、その面取りされた形態で、大きさによりI・II類に分けることができる。

A I類—最大3.3×4.0cmの方形で、長さ（推定）12.7cm。

A II類—最大1.9×2.2cmの方形を面取りしたもので、長さ（推定）5.5cm。

B類は、矢鉄A I類と類似するが、全く異なるのは、先端部に刃をつけることである。また、最も厚い部位が頭頂部にある点である。刃部幅は、3.4cmで最も厚い部位が頭頂部にある点である。刃部幅は、3.4cmで最も厚い部位3.0×4.0cmの方形である。

このノミの用途については明確でないが、石材表面の加工に用いられる「ひらのみ」や「仕上のみ」に形態が類似することから、石材表面の加工用のノミと考えられる。

蹄鉄

先述の石材搬出用の道と考えられる部分で、水平な岩面に近いところで完形の蹄鉄が1点出土している。その形態は、開口部が狹まるV字形で、長さ10.2cm（復元長10.7cm）、最大幅10.2cmで、厚さは、開口部外側で0.7cm、内側で0.4cm、先端部は使用による磨滅で欠損しているが0.3cm前後であろう。また、左右対称に0.5~0.6×0.7~0.8cmの長方形の釘穴をあけている。釘穴は、接地面で大きく、装着面で小さくなっている。接地面の釘穴の外側には、幅0.2~0.3cm、深さ0.1~0.2cmの溝が刻まれている。

第6地点に近いところで、もう一点の蹄鉄が出土しているが、その部分には、道と考えられる痕跡はなかった。この蹄鉄は、先のそれとは異なり半裁していると考え復元すると「八」の字形になる。同様の釘穴を穿つ点は似るが、溝は刻まれていない。異形の蹄鉄は、馬がヒヅメを傷めたときに、それを保護、矯正するために使用するもので、その形態は一定でない。

これら2点の蹄鉄は、石材の搬出が馬によって行われていたことを示すものと考えられる。

3.まとめ

当地点における石材採掘の時期を明らかにし得る土器、陶磁器類は、今回の調査でも出土しなかった。

矢鉄は、古墳時代以降に出現するようであるが、その形態変遷は明らかにされていず、変化するかどうかさえ明確でない。しかし、60余点の出土は、その形態分類、使用目的を明確にするうえで重要な役割を果たし、縦割り、横割り、小割りの限定ができた成果は大きい。

蹄鉄の出土は、当地点の石材採掘の操業時期を明らかにするうえで、土器、陶磁器以上に重要な位置を占める。すなわち、蹄鉄は、幕末の開港に伴い諸外国から馬に装着した状態で、初めて日本に現われた。そして明治

時代になると日本でも製作され出したが、一般に普及したのは明治20~30年代といわれている。

付近在住の明治40年代生まれの人達は、当石材採掘址の存在を知らないことから、大正年間には操業されていなかったと考えられる。したがって、当石材採掘址は、明治時代後半のものと考えてよいだろう。



fig. 342
凝割り矢鉄出土状況



fig. 343
同上(片面石材除去後)

北神第9地点遺跡

1. はじめに

当地点は、分布調査で古墳が1基存在することが記載されているところで、昨年度、トレンチによる試掘を実施した。その結果、尾根上に2基の古墳が相接して築かれていることが明らかになった。それらを1号墳・2号墳とし、今年度調査に至った。

武庫川の支流有馬川を眼下に望むことのできる標高205m前後の丘陵頂部に立地する。付近の丘陵は、すでに造成工事が終わっており、旧地形をとどめていないが、かっては、当古墳の南の丘陵上には、弥生時代末～古墳時代初頭の土器棺群や古墳時代後期、終末期の古墳が存在した。また、谷を一つ隔てた西側の丘陵上には、弥生時代中・後期の大規模な集落址が存在する。

2. 調査の概要

1・2号墳とともに丘陵頂部に築かれているが、1号墳頂には祠があり、それに至る道や石段が1・2号墳を縦断しているため、それぞれ墳頂部の擾乱が著しい。



fig. 344 溝査地位置図 1:5,000



fig. 345 調査地全景



fig. 346 1号墳・2号墳墳丘測量図

(1) 1号墳墳丘

墳頂部は、表土直下に岩盤が露出し、盛土はほとんど取り去られ、わずかに祠の存在した約1m角の部分のみ盛土が残されており、0.5m前後確認できた。墳丘は、平地に面する南側と山道や石段の存在した西側は大きく崩壊しており、旧状をとどめない。北斜面は、表土下0.2~0.4mで盛土に達し、墳丘裾部に至る。裾部は、幅0.5m前後の幅で小段が直線に造られている。2号墳との境になる東側は、岩盤を1m前後切り込み墳形を整えている。

北側及び東側で明確な墳丘裾部を基に、墳丘規模を復元すると、東西14m、南北11mの長方形墳になる。北側小段から計測した墳丘の高さは、最も良好な残存部で2.5mである。北側以外の小段の存在は、墳丘崩壊が著しく明らかでないが、東側へは少しのび、西側にも存在したような形跡は認められた。

埋葬施設

埋葬施設は、墳丘長軸に平行に1基存在した。掘形は、岩盤を切り込み、幅1.3m前後、長さは4.2mの長方形で、深さは検出面から0.55m前後であるが、検出面から0.4mあたりで二段掘りにしている。

割竹形木棺

木棺の痕跡は、幅0.6~0.7m、長さ3.6mで、断面形は半円形である。このことから、割竹形の木棺が埋置されていたと考えられる。棺内埋土の土層断面に見える棺壁に沿う土層の変化が木棺材の厚さとすれば、それは



fig.347
1号墳主体部

6 cm程度に復元できる。

棺底は、西側にわずかに高いことから、西枕と考えられるが、木棺幅は両端とも同様であることから確定できない。

出土遺物 遺物の出土は乏しく、墳丘南斜面から土師器壺口頸部が1点、北側小段から土師器壺口縁部1点が出土したにとどまり、埋葬施設内からは全く遺物の出土はなかった。

築造時期 築造時期は、2点の土師器によるしかないが、布留式併行期と考えられ、それ以上の細分は困難である。従って四世紀代から五世紀初頭にかけて築かれたと考えられる。

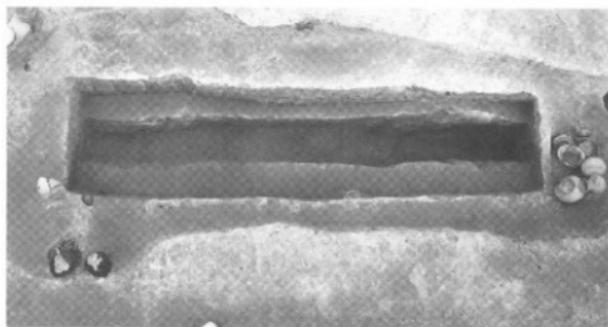


fig. 348
2号墳東主体部

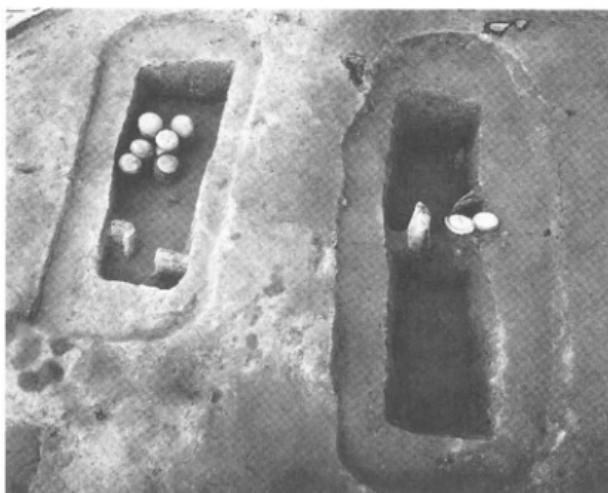


fig. 349
2号墳中央・西主体部

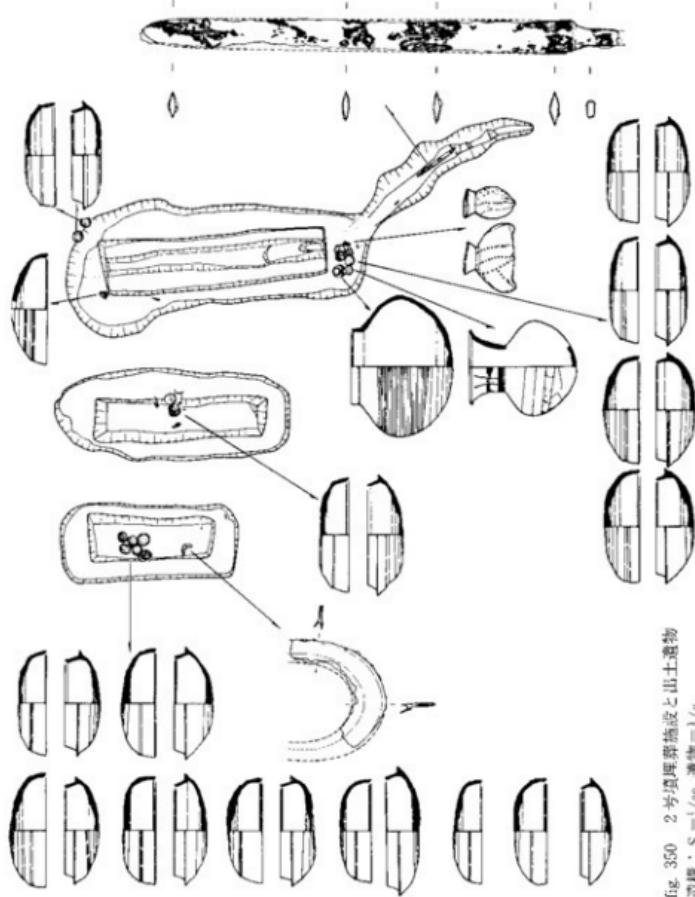


fig. 350 2号墳埋葬施設と出土遺物
造構 : S = 1/90 遺物 = 1/8

- (2) 2号墳墳丘 1号墳の東側に隣接し、約3m高い丘陵頂部に築かれている。墳丘斜面は、1号墳同様に擾乱や崩壊が著しく、旧状をとどめるのは北半のみである。墳頂部もまた、擾乱による凹凸が著しく、表土直下に須恵器片が近世瓦と同層位で散布し、一部岩盤が露出していた。墳丘斜面は、表土下0.2~0.4cmで盛土面に達し、墳頂部から高さで2.5m下った付近で傾斜を変換する。1号墳のように小段は設けていないが、この変換点が墳丘裾部と考えられる。北側斜面から1号墳との境にかけて残存するこの変換点を基に墳丘規模を復元すると、径15mの円墳になる。
- 埋葬施設** 埋葬施設は、南北方向を主軸にする3基が平行して存在した。3基とも規模を異にするが、北端を一直線に並べている。
- 東埋葬施設** 三つの埋葬施設の内で最も大きく、掘形幅は北側で1.6m、南側で1.1m、長さ4.3mの隅円長方形で、深さは検出面から0.25~0.35mで、北から南へ下っている。南3分の1は岩盤を底面としている。掘形中央部には、主軸に並行に岩盤を掘り抜き、排水溝を設けている。その幅は、0.3m前後で、深さは0.25~0.4mで、底面は北から南へレベルを下げ、一部段状になっている。掘形の外へ出た排水溝は、東に屈曲し、更に底面のレベルを下げながら、墳丘中位に抜けている。
- 木棺** 木棺は、北側で0.8m、南側で0.6m、検出した深さは0.25m前後で、底面は掘形底と同様に北から南へ下っている。
- 出土遺物** 出土遺物は、北端拵形肩部に須恵器壺蓋・身が伏せて置かれていたのと、棺外南側木口に須恵器壺が4セット、壺2点、皮袋形提瓶1点がまとめて置かれていた。また、棺内埋土中には、300点を越す玉玉や碧玉製管玉3点、鉄製品などが含まれていたが、埋葬時には、棺蓋上に置かれていたものが、棺蓋の腐朽とともに落ち込んだと考えられる状況で出土している。
- 中央埋葬施設** 掘形内から墳丘斜面に出た排水溝が終わろうとするあたりに、先端を墳丘内に向けて、ほぼ完形の鉄劍が置かれていた。劍身にサヤと考えられる木質が全面に付着し、鈎の部分のみ木質が切れている。埋置された時点では、鈎が装着されていたと考えられるが、その素材が木製などの腐朽しやすいもので、痕跡のみ残しているのであろう。
- 木棺** 木棺は、長方形の箱形で、幅0.6m前後、長さ2.4m、深さは検出面から0.3~0.4mである。
- 出土遺物** 遺物は棺内に元から埋置されていたと考えられるものはなく、棺中央付

近の木棺と掘形の境に、須恵器壺蓋・身が伏せて置かれ、その周辺に碧玉製などの管玉6点、ガラス小玉2点が酸化鉄とともに出土している。また、鉄・鉄刀子なども数点出土している。

西埋葬施設

三つ埋葬施設のうち最も小さいもので、掘形の平面形は、隅円の長方形で、幅1.05~1.15m、長さ2.45mである。深さは、検出面から0.15~0.35mで、底面は北から南へ0.1m前後下っている。

木棺

木棺は、長方形の箱形で、その幅は北側で0.7m、南側で0.6m、検出面からの深さは、0.1~0.25mで、掘形底面と同様に北から南へ下っている。

出土遺物

棺内には、須恵器壺6セットが蓋・身を重ねたまま、その他に蓋2点、身1点とともに重なり合って出土した。これらの須恵器と少しはなれ、鉄製鋤先などの鉄製品が出土している。これらの遺物は、出土状況から棺内に副葬されていたとは考えられず、棺蓋の腐朽とともに落ち込んだと考えられる。

遺構内からの遺物の出土は以上であるが、墳丘上から須恵器の壺蓋、無蓋高環、短頸壺、横瓶などが出土している。これらは、埋葬時の墳丘祭祀に用いられたものであろう。

出土した土器はすべて須恵器のみで、土師器は全く出土していない。

製造時期

出土した須恵器は、二時期に分類できるが、いずれも六世紀前半代に比定できる。出土状態は、混在しており、埋葬されたのはその新しい形態になってからと考えられる。したがって、六世紀中葉に鑄造・埋葬されたと考えるのが妥当であろう。

次に3基の埋葬施設が同時期に設けられたかどうかであるが、それぞれの主軸をほぼ同じくすること、等間隔に並ぶことから、同時期ないしは計画的に埋葬されたと考えられる。



fig. 351 東主体須恵器出土状況



fig. 352 東主体排水溝内鉄剣出土状況

(3)一字一石経塚 1・2号墳の墳丘内・外の斜面から5基の一字一石経塚が出土している。また、2号墳々頂からは、破碎された瓦片と数十点の一字一石経が搅乱された土層から出土していることから、山道が敷かれる以前にはもう1基存在したと考えられる。

1号経塚 1号墳の西側墳丘外斜面に築かれたもので、不整形の掘形の底に平瓦を敷き、一字一石経1241個が納められ、その上に平瓦の蓋を置いていた。掘形は、他の例から本来は平瓦1枚分の大きさであったと考えられる。

2号経塚 1号経塚の西側墳丘斜面に築かれたもので、方形の掘形で1号経塚と同様の方法で一字一石経1252個が納められていた。

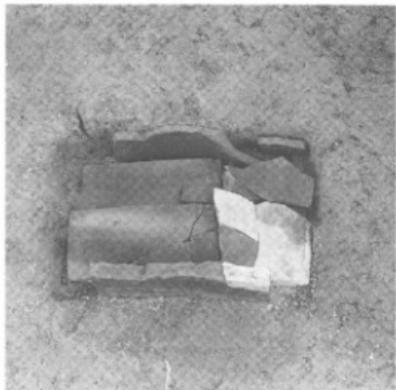


fig. 353 3号経塚検出状況



fig. 354 同瓦蓋除去後



fig. 355 同蝶石経除去後

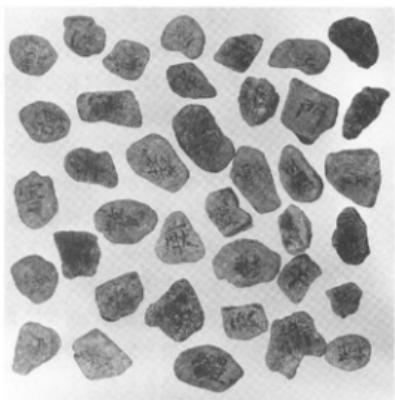


fig. 356 一字一石経

- 3号経塚** 2号経塚の北側斜面下方に築かれたもので、長方形の掘形底に平瓦を敷き、四辺には平瓦を立て並べ、上にはやはり平瓦で蓋をしていた。その中に一字一石経1161個が納められていた。
- 4号経塚** 2号経塚から北方へつづく尾根鞍部に築かれたもので、3号経塚と同様の構造を示すが、平瓦とともに桟瓦も使用されていた。納められた一字一石経は1496個である。
- 5号経塚** 1・2号経塚間の南側斜面に築かれたもので、構造は1・2号経塚と同様である。掘形は、岩盤を切り込んでおり、平瓦とほとんど間隙がないように掘られている。納められた一字一石経は、2286個である。
- これら5基の経塚の築造時期は、外容器的に使用された平瓦、桟瓦によるしかないが、近世瓦の編年研究が未だ進んでいらず、江戸時代後期以降としかいえない。
- ### 3. まとめ
- 第9地点1・2号墳の立地は、先にも述べたように数基で構成された古墳群の中の一つである。それらの古墳は、いずれも築造時期を異にしており、一朱団が継続的に築造したものと考えられる。その中で1号墳は最も古く築造されたもので、第45地点遺跡の土器棺墓群（弥生時代終末～古墳時代初頭）につづくものと考えられる。また、2号墳は、六世紀初頭に築造された小竪穴式石室を有する第13地点古墳に次ぐもので、六世紀末葉に築造された横穴式石室を有する第35地点古墳に先行するものである。
- 道場町周辺の丘陵上には、横穴式石室を有する古墳が多数造営されているが、それらは塩田地域の平地部の東及び北方の丘陵上に集中しており、当古墳の存在する丘陵付近とは様相を異にする。
- また、当地点の北方0.9kmの丘陵上には、横穴式石室を有する円墳（第2地点古墳）と前方後円墳（第3地点古墳）が存在する。この2基の古墳の周辺には、他にも古墳が存在したようで、有馬鉄道敷設時に地元民らによって発掘されたといわれる遺物が、日下部自治会に伝えられている。
- 第9地点古墳などと、この第2・3地点古墳を同一集団の造営に係るものと考えるかどうかであるが、第9地点古墳などは、現日下部の集落付近を見おろすように弧状に築かれ、さほど距離をおかないこと、第2・3地点古墳は距離をおくことと、現在知られない古墳とともに一群を構成していたのではないかと考えられること、墳丘規模、石室規模が大きいことなどから、別集団の造営によると考えられる。しかし、時期的には、第9地点2号墳と第35地点古墳の間を埋める時期と考えられるから、同一集団の造営に係るものと考えた方が自然かもしれない。

北神第15地点遺跡

1. はじめに

当地点は分布調査時に古墳として扱われ、それに基づき土木局と協議の結果、現状保存地点として今年度まで凍結されてきた。しかし、顕著な古墳状隆起が認められないことや、狹小な谷の最奥部にあり、全く展望のきかない点などから、古墳と断定するのは困難であり、確認調査を実施することになった。

2. 調査の概要

古墳として取り扱われてきた丘陵頂部を中心にトレンチを設定したが、古墳とする資料は全く得られず、また、地形も人為的に変形されている部分は全くないことから、古墳ではないとの結論に達した。

しかし、当丘陵付近は、地元で「人斬り塚」などと呼称され、周辺には、「首洗い池」や「地獄谷」と呼称される所も存在するため、近世の「斬首場」ではないかと考えられることから、全面調査を実施することになった。

埋葬施設

その結果、23基の埋葬施設と考えられるものが出土した。これらは、斜面を削平し、わずかに盛土をすることによって得られた水平面に土壙を掘るもの（A類）と丘陵斜面の中でも平坦に近い部分に浅い土壙を掘り込み、その上部に盛土をし、いわゆる「塚」状にするもの（B類）に分類できる。

A類は、造り出された平坦面が、小さいもので $1.8 \times 1.5\text{m}$ 、大きいもの

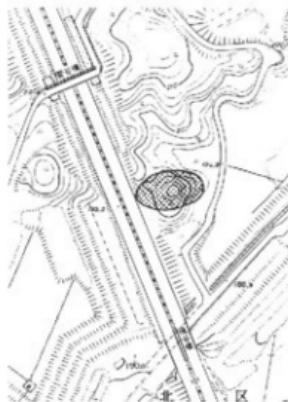


fig. 357 調査地位置図 1:5,000



fig. 358 調査地全景

で2.5m×3.0mの梢円形で、規格は認められない。その平坦面の中央に掘り込まれた土壙は、径0.8~1.0mの円形で、深さは0.4m前後である。

B類は、1.5~2.0×1.1mの長梢円形ないしは長方形の「塚」を有し、その下部に「塚」よりやや小さめの浅い土壙を有する。

A・B両類の土壙とも、埋土にわずかの炭化物を混じている。出土遺物は、ほとんど認められないが、A類から「寛永通宝」1点、鉄片などが出土し、B類からは、断面丸形の釘、鋳鉄製堀などが出土している。

3.まとめ

当地点は、古墳の存在は否定されたものの、伝承にある「首斬り塚」を裏付ける遺構が確認された。しかし、斬首場であることを積極的に言い得る資料はなく、A類については江戸時代の墓地であるというにとどめたい。B類は、断面丸形の釘が出土していることから明治時代以降のものであろう。



fig. 359 埋葬施設

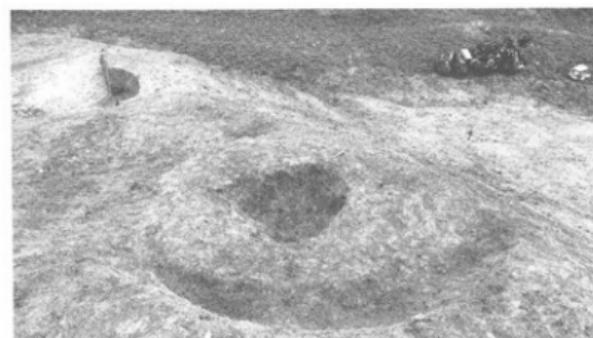


fig. 360 埋葬施設

北神第53地点遺跡

1. はじめに

北神戸三閉地第一地区内の石材採掘址は、分布調査時には第5・6地点遺跡が知られたのみであったが、第5地点遺跡調査中に掖谷以東の分布調査を改めて実施したところ、10か所を新たに確認した。それらのうち、今年度工事で影響を受ける地点について、北神開発事務所と協議を重ねた結果、当地点を全面調査する結論に至った。

2. 調査の概要

当地点の現状は、第5地点遺跡と同様尾根筋から急斜面が存在し、広い平坦面がそれにつづき、緩斜面を徑て谷底に至る。しかし、谷状に掘り進んだ痕跡は認められない。

石材採掘址

調査は、尾根筋から谷側へと厚く堆積した土石を取り除くよう進めた。その結果、尾根筋から約2.6m垂直に落ち、5~6m比較的水平な面が存在し、さらに垂直に約2.5m落ち粘土層に達する。粘土層も幅約10cm前後の水平な面を形成している。採石の対象となる岩石は、第5地点遺跡と全く同じ凝灰質砂岩で、その厚さは約5mである。水平な面に捨てられた土石の堆積状況は、第5地点遺跡と同様で、採石面より後方へと積み上げられている。



fig. 361 調査位置図 1:5,000



fig. 362
第53地点全景(西から)

当地点の採石は、谷に面する斜面に露頭する岩盤を尾根筋に向かって切り進み、尾根筋に達したところで終えている。

矢穴 矢穴は、16か所36個確認できた。矢穴の大きさは入口部の幅が6.0~7.5cm 奥部幅が3.0~5.0cm、深さ5.0~8.0cmと、第5地点遺跡でみられたそれよりも幅、深さともに大きい。

矢鉄 矢鉄は、全形を知り得るもの1点で、矢穴の大きさと比例するかどうかを比較するには少なすぎ、矢穴規模の差が何によるのか明らかでない。出土した矢鉄は、第5地点遺跡で分類したA I類で、縦割り用に打ち込まれた状態で出土している。

ノミ ノミが2点出土しているが、第5地点遺跡で分類したA・B類各1点である。当地点では、その操業時期を明らかにし得る遺物の出土が全くないが、第5地点遺跡と差はないと考えられる。

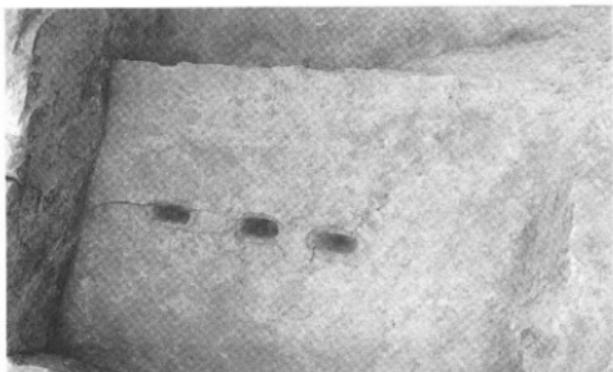


fig. 363
縦割り矢穴



fig. 364
縦割り矢穴

24. 宅原遺跡（岡下地区）

1. はじめに

神戸市北区長尾町付近は武庫川の支流長尾川によって形成された、沖積地が川に沿って広がる。

宅原遺跡は長尾川の右岸に位置し、南から北に派生する丘陵先端の低位段丘面及びその下に広がる沖積地に立地する。

当遺跡の調査は昭和58年度、宅原1号線建設（辻垣内・大前地区）に伴う調査と、その後の圃場整備事業に伴う調査が実施されている。

辻垣内・大前地区では古墳時代中期前半～後期中葉までの竪穴住居址7棟、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物15棟などをはじめ、溝・土坑などが発見され、多量の遺物が出土している。また、蓮花寺地点では鎌倉時代の建物址や木棺墓なども発見されている。

周辺の遺跡としては、南東方丘陵上に弥生時代中期後半から後期の北神第4号地点遺跡がある。また、北方の三田市境界に接する丘陵上には、古墳時代後期の古墳の存在などが知られている。

今まで、当地域の遺跡分布には不明な点も多いが、最近、周辺部の圃場整備事業の調査によって、数多くの新知見を加えつつあり、今後この地域の歴史がより明らかになると考えられる。



fig. 365 調査位置図 1:5,000



fig. 366 調査地全景(南から)

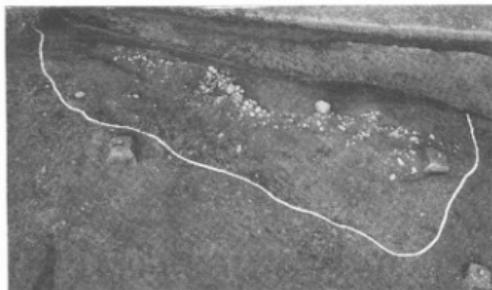


fig. 367 SK01



fig. 368 大溝(南から)

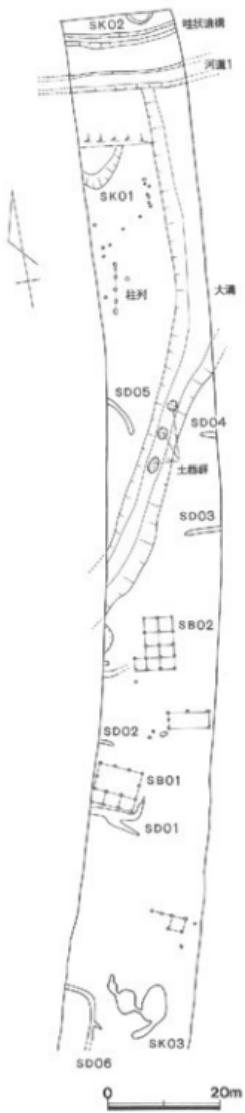


fig. 369 調査地遺構平面図

2. 調査経過

今回の調査は北神中央線の建設に伴うもので、昭和60年10月21日～昭和61年1月30日まで実施した。調査対象地は、周辺地における圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査や、先年度に実施した試掘調査をもとに決定した。今年度の調査は長尾町宅原字岡下地区で道路幅員約20メートル、路線長180メートル、面積約3,900平方メートルの範囲で実施した。

調査地は南から北へ派生する丘陵先端に近い低位段丘と段丘下を流れる長尾川によって形成される沖積地である。試掘調査では飛鳥時代から鎌倉時代までの遺物包含層が地表下40cmから250cmまでの間で発見された。このため、遺物包含層が200cmを超えると予想される部分では鋼矢板の圧入を行い、調査を実施することとした。また、耕土以下、遺物包含層までの間の埋土は重機等を用いて作業の円滑な進捗を図った。

3. 遺構

①飛鳥時代～奈良時代（7c～8c代）の遺構

この時期に属する遺構としては、土坑（SK01）・大溝・河道1などがある。

SK01

調査区域北側で検出された長方形の土坑で、鹿ノ子川の南側河岸段丘上の北端、標高165mのところに立地している。北側は後世の削平を受けているため、全体の規模は不明であるが、現状では、南北2.0m、東西7.0m、深さ0.2～0.4mを測る。

埋土は径5cm～20cmの大砾を多く含む炭混じりの暗灰色砂質土で、その中から、飛鳥時代中頃の須恵器环・壺・甕、土師器高环・甕等が出土している。

大溝

調査区北半部で検出された南西から北東へ流れる断面V字形の溝状遺構である。鹿ノ子川に沿って東西にのびる段丘上に立地しており、地形的にはやや谷状に凹んだ所に位置している。

大溝は、標高約170mの調査区中央部西壁付近から、標高約166m付近にかけてはゆるやかに「く」の字形に2～3度屈曲しながら、南西方向から北東方向へと流れているが、標高約166m付近から、標高約163mの調査区北端東壁付近にかけては、ほぼ直線的に南側から北側へと流れている。

調査区内で検出された大溝の全長は、約110mであるが、南西方向及び北東方向へと調査区外にのびている。大溝の幅は、標高170m付近で6.0m、標高168m付近で5.5m、標高167m付近で9.0～11.0m、標高166m付近より北側については、大溝の東側が調査区外であるため、規模は明らかではない。大溝の深さは、標高170m付近で約1.5m、標高168m付近で約1.6m、標高167m付近で約2.2m、標高166m付近で約1.6m、標高163m付近では約1.3mまで掘り下げたが、完掘していないため不明である。また、大溝

の東西断面は、南西部では鋭角的なV字形を呈するが、北東部ではやや傾斜が緩やかになる。

埋土の堆積状況は、基本層序としては、最下層に遺物を全く含まない青灰色砂礫土層が0.5~1mあり、その上に、飛鳥時代中頃の遺物を多量に含む暗青灰色粘土層（下層）が0.5~0.6mあり、最後に奈良時代一室町時代の遺物を含む灰色粘質土層（上層）が0.5~0.6mある。さらにこの土層を細かく見てみると、大溝の南側と北側とでは、若干の相違があり、標高167~168m付近では、最下層（青灰色砂礫土層）・下層（暗青灰色粘土層）・上層（灰色粘質土層）の順に堆積しているが、標高166m付近では、上層と下層の間に遺物を殆んど含まない淡灰色粘質土層がみられ標高163m付近では、同じく上層と下層の間に遺物を含まない暗灰色粘質土層がみられる。また、下層（暗青灰色粘土層）の中でも、最下層の直上付近に遺物が多く、炭も多く混じっており、上層付近は、比較的遺物が少ない。



fig. 370 大溝断面土層堆積状況



fig. 371 大溝下層土器群A出土状況実測図

上層からは、奈良時代～室町時代の須恵器、土師器等が出土しており、下層からは、飛鳥時代中頃の須恵器坏・高坏・塊・直口壺・台付長頸壺・小形壺・壺・平瓶、土師器坏・高坏・塊・壺・壺等の他、砥石が1点出土している。特に大溝内下層の3か所で、遺物が集中して出土している（土器群A～C）。

また、大溝西側の標高166m付近で南北方向に並ぶ掘立柱柱穴を検出した。柱穴は約2m間隔で一列のみ5か所で確認された。柱穴は径20～30cmを測り、掘形はいずれも1辺70cm×80cmで、隅円長方形を呈する。この柱穴の東西には関連するような柱穴が全く検出されていないため、建物址になる可能性は少ないが、時期的にみると、大溝に伴う可能性が考えられる。



fig. 372
大溝内遺物出土状況
(北から)



fig. 373
大溝下層土器群A
出土状況(西から)

河道1

調査区北端で検出された東西方向に流れる断面V字形の河道である。標高約162mのところに位置し、鹿ノ子川の沖積地南岸に位置している。

河道は南北方向に流れる大溝にはば直交しており、大溝内下層埋土を切っている。

河道の幅2.3~3.0m、深さ0.4~0.6mを測り、河道の底のレベルは、西側より東側の方が約0.7m低くなっている。

埋土(暗緑灰色シルト層)内より、飛鳥時代中頃~奈良時代の須恵器壺・塊・台付長頸壺・甕・鉢、土師器壺・壺等の他、流木が出土している。



fig. 374
河道1(西から)

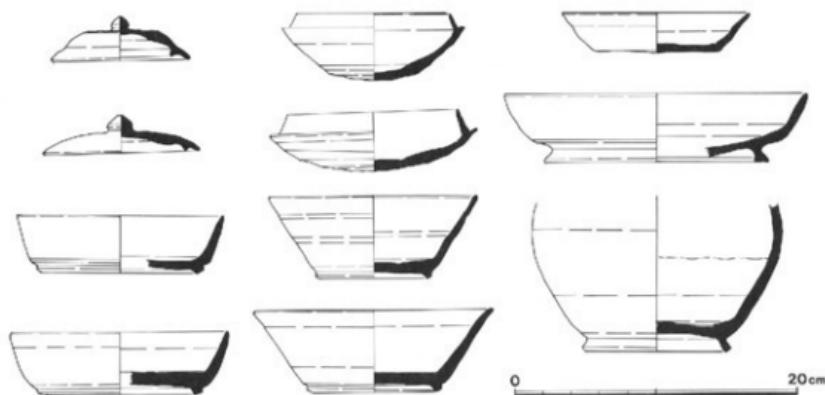


fig. 375 河道1出土遺物実測図

②鎌倉時代～室町時代（12c～13c代）の遺構

この時期に属する遺構としては、S B01・S B02・S D01～S D05・S K03の他、ピット・土坑等がある。

S B01

調査区南側で検出された3間×3間以上の掘立柱建物址で、鹿ノ子川に沿って東西方向にのびる段丘上に立地している。

南北6.0m、東西6.6m以上を測り、西側は調査区外にのびている可能性が考えられる。遺構面がかなり削平を受けているため、柱穴の残存状況は悪く、現状では径10～15cm、深さ5～30cmを測る。

S B01の北側から西側にかけてL字状にめぐるS D01は、この建物に関する雨落ち溝と考えられる。

また、S B01の柱穴埋土より、須恵器・土師器片が出土している。

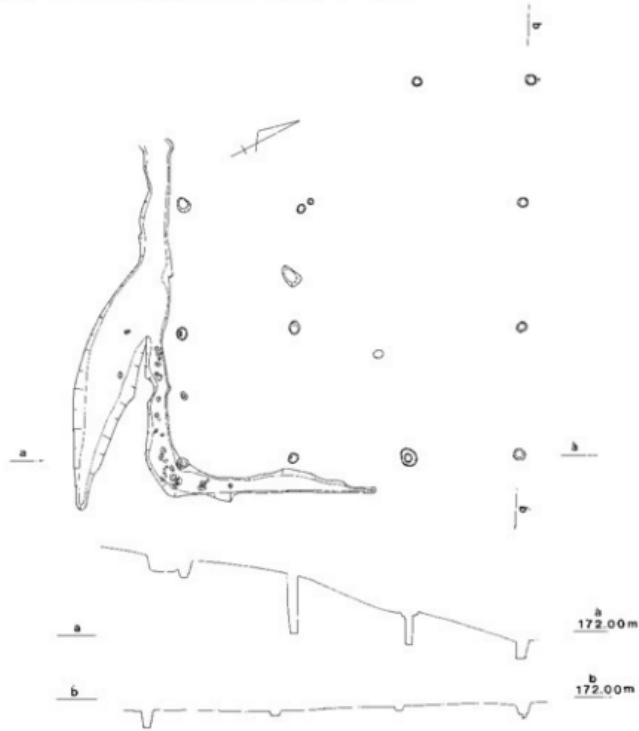


fig. 376
S B01・S D01平面図

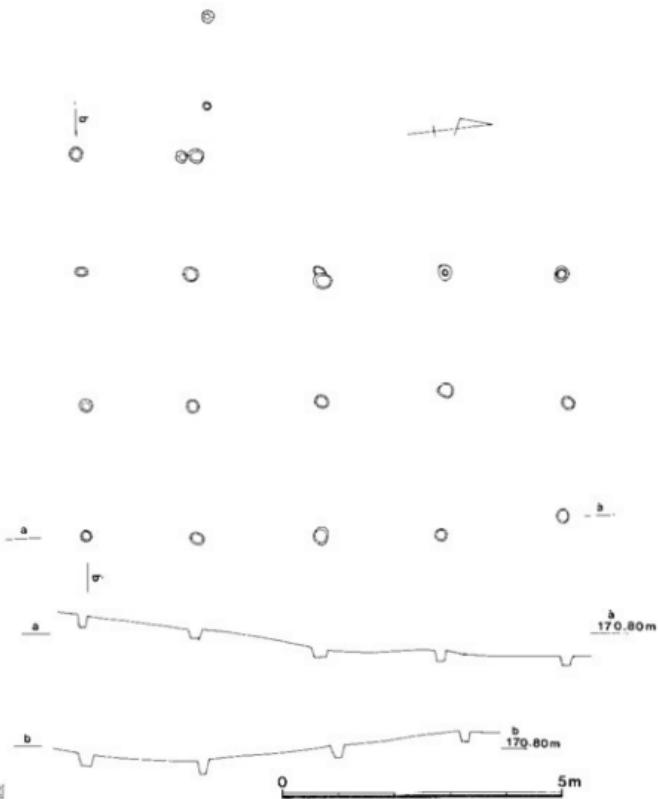


fig. 377
SB02平面図

SB02 調査区中央よりやや南側で検出された南東隅に1間×1間の張り出しをもつ1間×2間の掘立柱建物址である。SB01より北方約20mの段丘上に立地している。

南北8.8m、東西4.8mを測り、柱穴は径10~15cm、深さ5~10cmを測る。柱穴埋土内より遺物は出土していないが、周辺から出土する土器等から中世の造構であると考えられる。

SD01 SB01の北方約4mに位置する東西方向に流れる溝状造構で、幅0.3~1.5m、深さ0.1~0.2mを測る。この溝は、南東隅で2条に分かれており、1条は東側へのび、もう1条は東側へのびた後北側へ屈曲している。また、西側は調査区外にのびている。埋土内より中世の須恵器・土師器片が出土している。

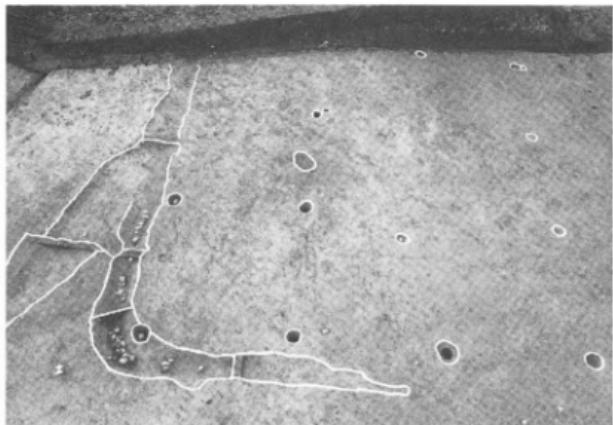


fig. 378

S B 01・S D 01(東から)

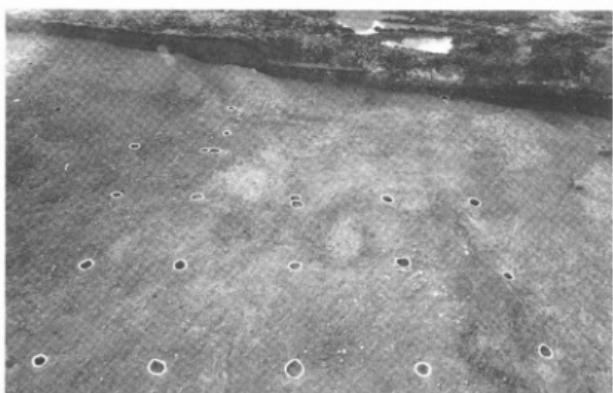


fig. 379

S B 02(南から)

S D 02

S B 01の北方約4mに位置する東西方向に流れる溝状遺構で、幅30cm、深さ10cmを測る。西側は調査区外にのびている。

S D 03

S B 02の北方約16m、大溝の東側に位置する東西方向に流れる溝状遺構で、幅30~60cm、深さ10~15cmを測る。東側は調査区外にのびている。埋土内より須恵器、土師器の細片が出土している。

S D 04

S D 03の北方約16m、大溝の東側に位置する東西方向に流れる溝状遺構で、幅20~30cm、深さ5~10cmを測る。東側は調査区外にのびている。

S D 05

S D 04の西方約12m、大溝の西側に位置しており、北西から南東方向に流れる溝状遺構である。幅40~80cm、深さ10~15cmを測り、西側は調査区外にのびている。

S K 03

調査区南端で検出された不整形の落ち込みで、長径7m×短径4m、深さ0.4mの楕円形の土坑とその西隣の長径4.5m×短径3.2m、深さ0.4mの楕円形の土坑より成る。2つの土坑は全長1.7m、幅0.4m、深さ0.1mの溝でつながっている。また西側の土坑から北西方向に全長4.5m、幅0.5~1.5m、深さ5~10cmの溝がのびており、東側の土坑から南西方向に全長0.5m、幅0.5~0.7m、深さ10~15cmの溝がのびている。この遺構については不明である。

また、調査区南側のS K 03の周辺には径20~40cmのピットが多数検出されたが、現在のところ、建物としてはまとまるものはわかっていない。

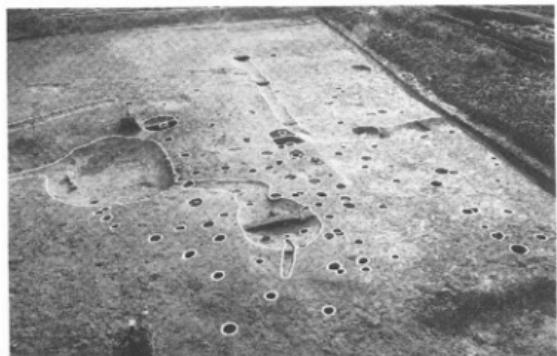


fig. 380

S K 03とピット群

③近世以降の遺構

この時期に属する遺構としては、S D 06の他、調査区南端の溝状遺構及びピット、土坑等がある。

S D 06

調査区南端のS K 03の西側で検出されたL字形にのびる溝状遺構で、幅0.4~1.0m、深さ5~15cmを測る。埋土内により丹波焼等の陶器をはじめ、磁器、瓦等が出土しており、近世以降のものと考えられる。

④時期不明の遺構

S K 02

調査区北端で検出された南北1.5m以上、東西4.0m、深さ25cmを測る楕円形の土坑で、北側は調査区外にのびている。埋土内からは木片等の植物遺体の他には全く出土遺物がないため、時期を確定することは困難であるが、土層より、奈良時代以降~中世以前である可能性が考えられる。

畦状遺構

S K 02の南側で検出された東西方向にのびる畦状の高まりで、上端部幅0.5~1.2m、下端部幅1.4~2.4m、高さ25~35cmを測る。畦状遺構には、径5~10cmの木杭が、約0.5~1m間隔で並んで検出された。時期はS K 02同様、奈良時代以降~中世以前である可能性が考えられる。

4. 遺物

①飛鳥時代～奈良時代（7c～8c代）

この時期の遺物が最も多く出土したのは、大溝内下層（暗青灰色粘土層）でコンテナ15箱分あり、次いで河道1の暗緑灰色シルト層で、コンテナ5箱分あり、SK01埋土からはコンテナ1箱分出土している。

須恵器

壺・高壺・塊・直口壺・台付長頸壺・小形壺・甕・平瓶等がある。

壺の中には、河道1及びSK01から出土した遺物の一部に、受部の立ち上がりをもつ壺身が3～4点みられるが、大溝内下層・河道1・SK01出土の壺のほとんどは、宝珠つまみとかえりをもつ壺蓋と、立ち上がりのない塊状を呈する壺身から成る。

壺身には、断面三角形あるいは台形で、ハの字形に開く高台をもつものと、もたないものがある。

大溝内下層出土土器の中で特筆すべきものとしては、天井部内面に「評」の墨書がある壺蓋を挙げることができる。この壺蓋は天井部のみ残存しており、口縁部を欠いているため、かえりの有無については不明であるが、偏平な宝珠つまみの形態や共伴する遺物等から見て、飛鳥時代中頃と考えられる。

また、河道1埋土からも、底部外面に墨書痕のある壺が1点出土している。この壺は、ほぼ完存しており、底部は平底で、口縁部はわずかに内脣しつつ上外方に立ち上がる。なお、墨書は不鮮明なため、文字として判別し難い。

土師器

細片が多く、器形を明確にできるものは少ないが、壺・高壺・甕等が、大溝内下層・河道1埋土・SK01埋土より出土している。

砥石

大溝内下層から1点出土している。形態はやや中央部が凹んだ角柱状を呈し、現存長約12cm、最大幅5.5cmで、4つの側面に使用痕が残っている。



fig. 381

大溝・河道1出土土器

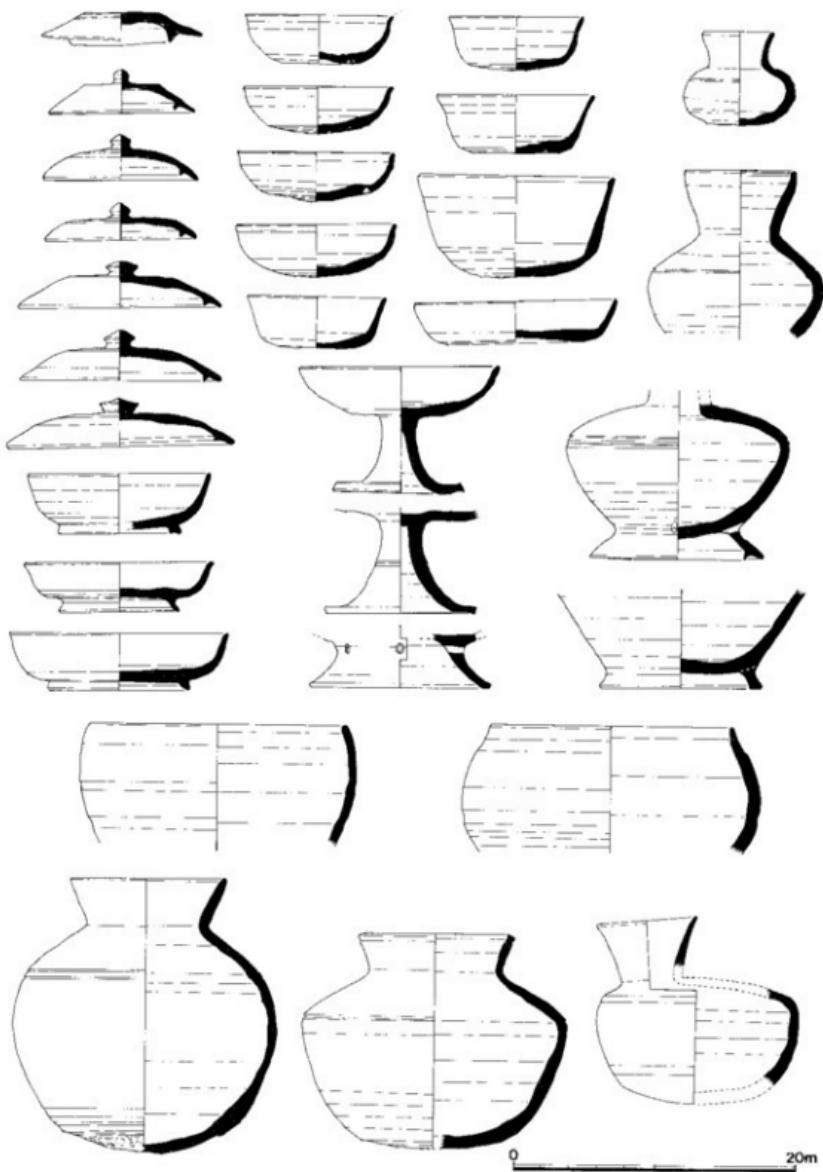


fig. 382 大清内下层出土土器实测图

②鎌倉時代～室町時代（12c～13c代）の遺物

この時期に属する遺構としては、S B01・S D01・S D03・S K03等の他、大溝内上層（灰色粘質土層）や包含層（灰褐色粘質層）からコンテナ8箱分出土している。須恵器壺、鉢、甕等がある。

③近世以降の遺物

この時期の遺物は、調査区南端の段丘上より出土しており、丹波焼等の陶器をはじめ、磁器、棟瓦等がコンテナ約1箱分ある。

5.まとめ

大溝

丘陵上に南北に流れるこの溝は、その中に投棄された遺物から、飛鳥時代中頃に造られたものであることが知られる。造成時に自然の谷の一部を利用して造られているにせよ、幅約6m、深さ2mの大規模なものである。調査地区内では、同時代の遺構が明確に存在せず、その性格も十分に把握できていないが、周辺の状況より、大溝の西方部に集落の中心があるものと考えられる。この大溝は、丘陵部よりの流水から集落を守ることと、集落の東辺を画する目的で穿たれたものと考えられよう。

墨書き土器

今回の調査では2点の墨書き土器が出土している。一点は河道内からの出土で奈良時代の壺底部に書かれたもので字は判読できない。

もう一点は大溝内より出土した須恵器壺蓋の内面に書かれたもので「評」と判読でき、時期は飛鳥時代のものと考えて大過なかろう。

「評」は「郡」の同義語で太宝律令以前は「評」、以後を「郡」を使用したと考えられている。

以上の2つの事実は、当遺跡が郡衙址である可能性を示唆するものといえる。また、周辺地の調査

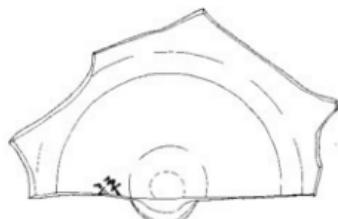


fig. 383 墨書き土器「評」実測図

において一辺70cm内外の大型の方形掘形の掘立柱建物址が発見されている。これらの建物址は遺物等の出土が少なく古墳時代後期のものとされているが、今後その規模や形状なども考慮し、再考する余地がある。

25. 宅原遺跡 (岡下地区)
 えいばら あかした
 宅原遺跡 (岡下地区)

1. はじめに 宅原遺跡は、武庫川の支流である有馬川、有野川、長尾川の三河川が合流する地点より西方に拡がる弥生時代～江戸時代に至る複合遺跡である。
 今回の調査地は、長尾川に流れ込む鹿の子川の右岸にある南から北へ伸びる小丘陵上とその西斜面である。
2. 調査の概要 今回の調査は、60年度圃場整備に伴い、遺跡部分に対し、切土、排水路等を施す箇所3,600m²について実施した。



fig. 384 調査地位置図 1:2,500

- I-1区 現表土下0.2~0.4mで遺物包含層を検出したが、遺構は全く検出されなかった。6世紀~7世紀の須恵器、土師器が出土した。
- I-2区 現表土下0.6~0.8mで遺物包含層が検出された。遺物はI-1区同様6世紀~7世紀代が中心となるが、一部、奈良・平安時代のものも含む。丘陵西端に当たり、遺構は全く検出されなかった。遺物は東側からの流入と考えられる。
- I-3区 現表土下0.2mで遺構面となっており、遺物は大部分この面の直上で出土した。当区ほぼ中央で一辺約0.6mの掘形を持つ柱穴が検出された。これらは南北方向の掘立柱建物の一部となることが十分考えられたため、調査区を拡張し、遺構の性格を追求した。(B地区、後述)

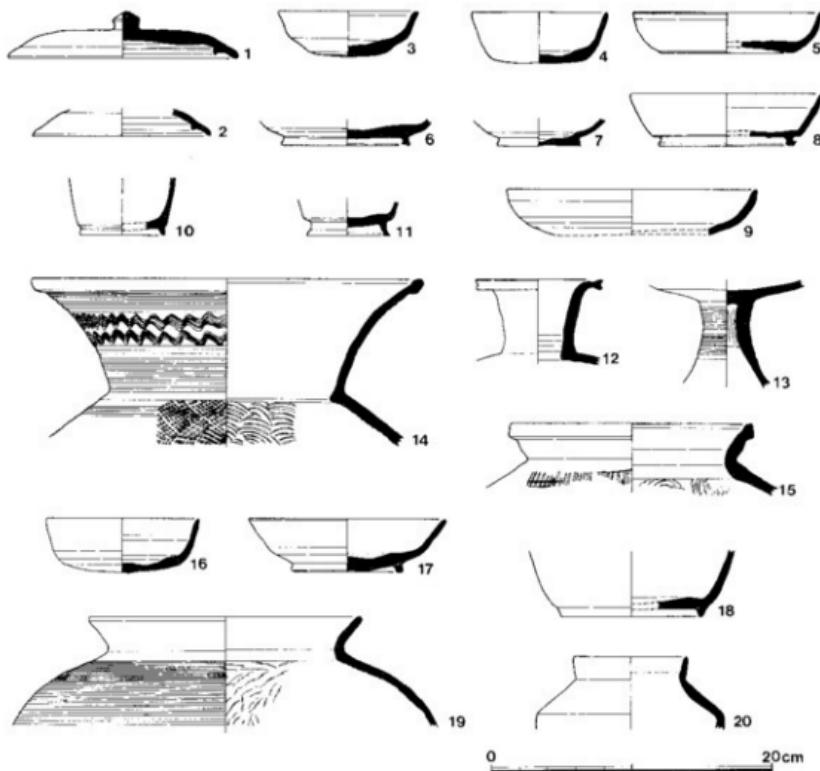


fig. 385 I-2区・IIトレンチ出土遺物 1~15 I-2区 16~20 IIトレンチ

- I - 4 区 現表土下約0.8mで6世紀～8世紀代の遺物を含む層を検出した。一辺約0.6m前後の柱穴掘形や、ピット、土坑等が検出されたが、これらに伴う遺物が殆んどなく、時期を決定することは難しい。
- I - 6 区 I - 3 区に平行する長さ約20mのトレンチで、I - 3 区検出の掘立柱建物の一部が検出された。
- II トレンチ 現表土下0.2～1.0mで包含層を検出した。遺構は調査範囲の狭小さよりまばらであったが、2区では一辺約0.6mの土坑等を検出している。
飛鳥～奈良時代の遺物が出土した。
- III トレンチ 時期不明のピットが数か所検出されたのみで、明確な包含層も認められなかった。
- V・VI トレンチ 宅地周囲の排水溝部分にトレンチを設定し、調査を行った。遺構としてはVトレンチで近代～現代の井戸が1基検出されたのみであった。
- VII トレンチ 現表土下約0.4mで遺物包含層（中世）が認められたが、遺構としては東端部でピットが4ヶ所検出されただけである。
- VIII トレンチ パイプライン敷設部分である。現表土下約2mで、青灰色粘質土をベースにした遺構が検出され、遺構内から弥生～古墳時代の土器が出土した。

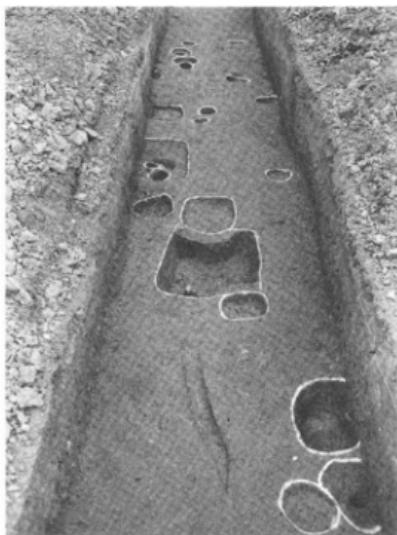


fig. 386 I トレンチ 4 区(北から)



fig. 387 VII トレンチ(東から)

A地区

柱穴、ピット等が30数か所検出されたが、まとまった遺構としては南北方向の柵状のものが認められた。遺構は調査区西北部にかたよっており、中心部分はこの西に拡がっているものと考えられる。

遺物は大部分包含層のもので、6世紀中葉～13世紀代の遺物が出土している。

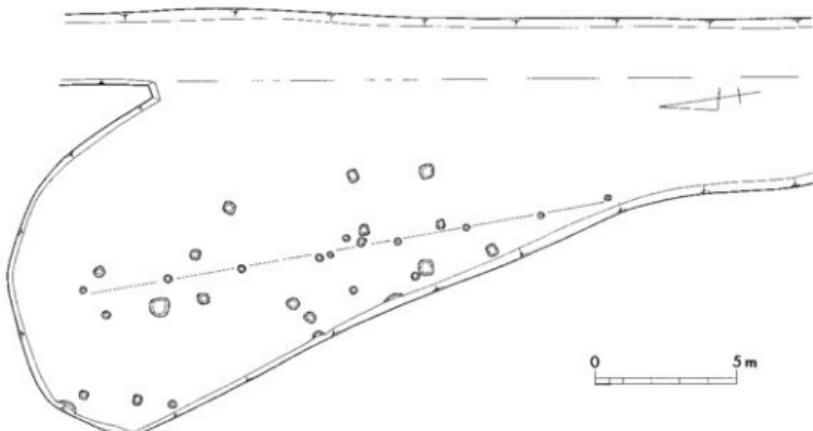


fig. 388 A地区平面図

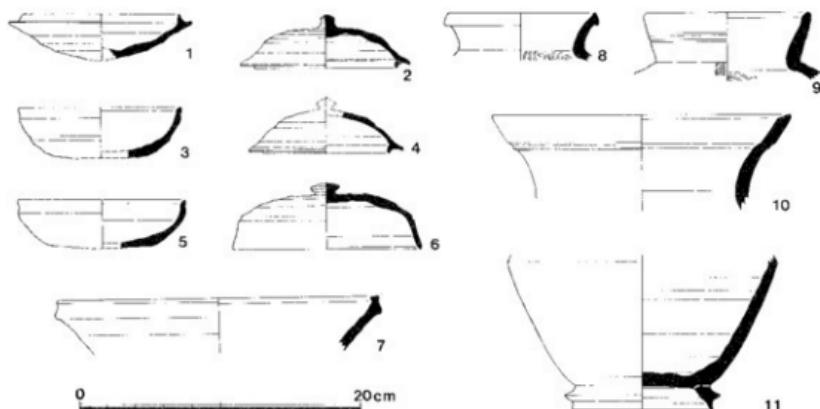


fig. 389 A地区出土遺物実測図

B地区

I-3区、6区で検出された遺構の性格を追求する目的で調査区を設定し発掘を実施した。

その結果、計6棟の掘立柱建物群が検出された。建物群は主軸を南北に置くa群（SB01）とやや西に振るb群（SB03~06）にわけられる。b群に属するSB04掘削内より6世紀後半（中村編年II-5）の須恵器环身片が出土している。また、遺構の切り合い関係よりa群がより古いと考えることができる。

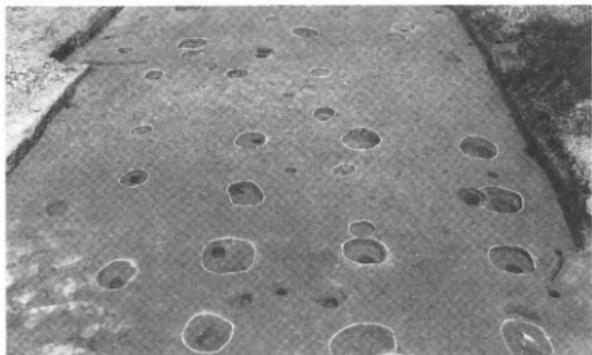


fig. 390 B地区(南から)

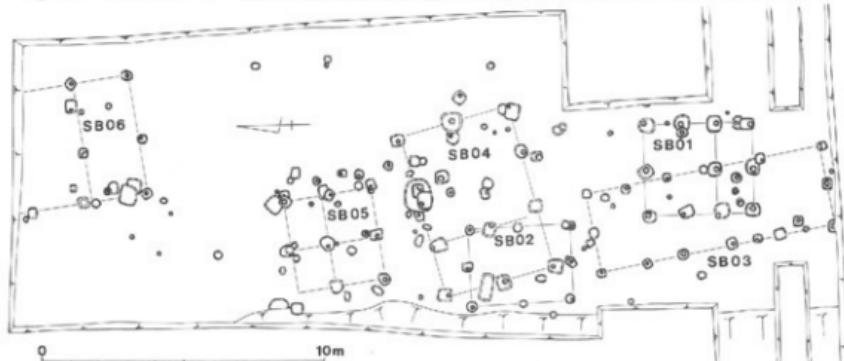


fig. 391 B地区平面図



fig. 392 B地区出土遺物 1 SB04出土

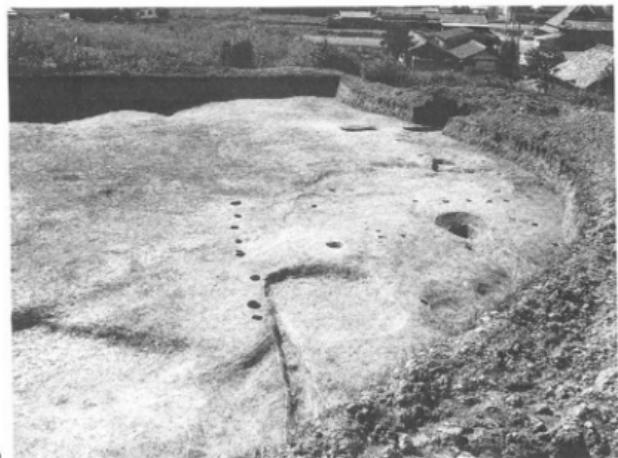


fig. 393
C 地区(東から)

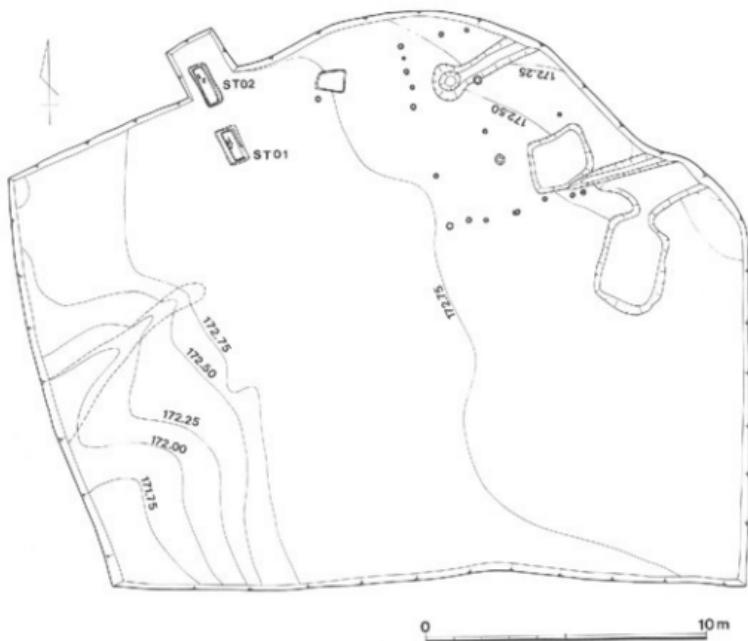


fig. 394 C 地区平面図

- C地区 調査地北端部より13世紀後半～末頃の木棺墓が2基検出された。
- S T 01 1.3m×0.6m×0.25mの長方形掘形内に1.1m×0.4mの木棺を直葬したものである。棺底中央やや北寄りで、切先を南東に向けた長さ0.34mの鉄刀1振が、また木蓋上に置いたと思われる中国製青磁碗1、土師器小皿5が棺内におち込んだ状態で検出された。また、鉄釘も計5本棺内より出土した。
- S T 02 S T 01の北、約0.8mでこれと主軸を一致させて埋置した木棺墓である。掘形規模は1.6m×0.6m×0.2mで、木棺は1.4m×0.4mを測る。棺内中央やや北寄りで土師器小皿4枚が検出された。これらも前者同様、木蓋上に置いたものが内部に落ち込んだものと考えられる。土師器の形態はS T 01出土のものと変わらず、ほぼ同時期と思われる。C地区ではこの他、溝、土坑、柱穴等を検出したが、遺構に伴う遺物がなく時期を決定できなかった。

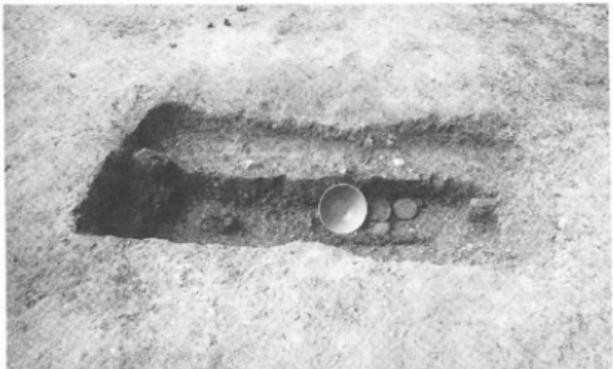


fig. 395 S T 01



fig. 396 S T 02